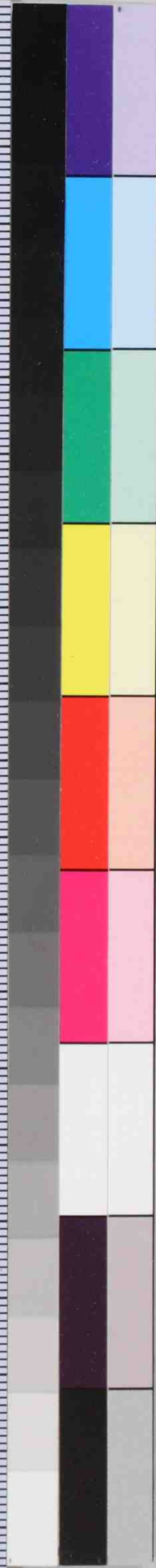




勘者御依能紙

5 6 7 8 9 330 1 2 3 4 5 6 7 8 9 340 1 2 3 4 5 6 7 8 9





勅老御伽雙紙序

木村文庫

夫乃書と云れくれと云ひさ  
傳へ一算問或と云りうかい  
捷徑の術秘公の爲る書と云  
一が時ありて去人の愁るる  
今梓よりあて勅老御伽雙紙と



号一々ある子のよりて好むとあり  
見る人け書よりとけきあぶる人ぞ  
何されより你さよりいさうさる人や

時寛保三年亥の正月日

洛陽中根保く悉法舳自序



勸孝御伽雙紙上目録

- 一 小町算の事 こまちざん 二ヶ條
- 二 人乃年救を基ふて二夜かどへせて知る事 とくねすけ ごい ど
- 三 人乃生年の十二支を知る事 とねうしう し ふ
- 四 同十干を知る事 とふえん
- 五 多にく人の十二支とある事 た ふ し ふ と あ る 事
- 六 同十干を知る事 とふえん し ふ と あ る 事
- 七 人の生年の十二支を知る事 とねうしう し ふ と あ る 事



八 十子たりざる事

九 さつさるる事だぞ

十 同つと三といふ事

十一 同つと三といふ事

十二 紐ひけと云ふ事ひきの事又あまたと云ふ

十三 薬師やくしぎんの事

十四 同三角ふなる事

十五 同五角ふなる事

十六 布盗人ぬのぬすひとの事 三ヶ條

十七 御ご算さんといふ事

十八 裁合物の事 十ヶ條

十九 百ひゃく減げんといふ事

二十 又三百十減の事

廿一 又六十三減の事

廿二 賞物しょうぶつの事

廿三 奇偶きぐの事



廿四 奇妙希代の事

廿五 龜のうろたひの事

勘者清伽雙紙上目録終

勘者清伽雙紙上

洛陽中根保く忠法舳編集

一 小町算の事 二テ條

とれとある 松のえとある 春のさかい 今いとあるの  
いろまうろ 空のけとある うふ 霞とあるて  
とあるや 雨とあるとある 梅枝り ねりねとある  
ういさの さんけとあるの やうとある 花とあるふ  
ある人と あるおとある 友とある 人々  
とあるて いつとあるぬ とあるの うとあると  
やとあるて いとある人々 おとある とうとあるて







短きやふ	くさけうねる	きうはや	屋敷ことゝのふ
くさけうね	何せおとけ	きう人乃	縁めあけぬ
せんざい	露と亀と	うけけ	きうあけ
きう	酒とめ	きうもふ	きう中
たの	きう	はぎめ	み十
きう	きう	おけ	さい
たの	きう	わぐ	下
あづ	ひく	た	い
うら	げ	縁	う
ひ	け	と	い

江浦	まれ	おも	い
人	縁	同音	縁
わ	中	それ	九十九
あ	あ	ゆ	率
中	一	三	又
七	九	う	さ
う	九	い	さ
そ	さ	あ	さ
あ	さ	こ	こ
今	今	中	と



あらずそ いところなりき りあやうき ちどめよんじ  
そくど乃 一二三四と もさ後乃 七八九十  
前後あり まぐいくを 見あひする きてそそこそ  
かぐどろり 一と七とや 二と八と 三と九ととや  
四と十と どのく別り けあひせ 四は係く  
九十あり こそそそそき ことをそと どのり文字の  
四、の四 ち夜の七 九の夜の 九のつとと  
合もまは 二十とろふ 九十とば くりい進はく  
百十と ありしそろち 六と六と ぬけーととと  
引とまは 残もまありち 九十九と あると答へて

ありどけバ せきのひとぐ かへまたえ せいのいと  
もとおは こそそしとバ わたれて る残くけうよ  
けあひの みのろとふ たちささぎ きたうだいもた  
このまを 籠よまをそ うちすそふちり  
又解ーていそく

前後

一 七、一の七、二、六、三、二、七、四、の四、十、四は合て九十九  
二 八 ね又重言よ四と七と九と合て二十あり  
三 九、六、合て百十と放け内六と六とのぬけととと  
四、十 合て十一とそれ餘即九十九とありなり







なりといひ九十九と答ふる也但し其令九十九と限と  
さむたる数なり九十九より多きことはいふ合ふ時九十九  
九減むことよりて答ふる也

三 人の生年乃十二支とある事

錢少くと基ふても物数十二支の人よはてしなく年の数程  
よりかへし〜かゞくさるるをたしめんとて何の年といふ  
事とある也たとへば當年三十二とある人あればそのかへし  
よりてその年より四つといふ事あるなりとの意なり

- ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
- 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 廿一 廿二 廿三 廿四  
廿五 廿六 廿七 廿八 廿九 三十 卅一 卅二 ○ ○ ○ ○ ○ ○

法曰ある数はいつても二つとて六つとあると當年  
亥の年なりと云ふ子丑寅卯辰と六つ目よりて辰の年  
ある〜といふなり

四 同十干をある事

錢少くと基ふても物数十支の人よはてしなく前のどく  
よりかへし〜かゞくさるるをたしめんとて十干とあるなり  
たとへば當年二十とある人なりとあることありたり  
法曰ある数はいつても二つとて六つとあるを



當年癸卯よりあるが癸卯乙丙丁戊己とある日は

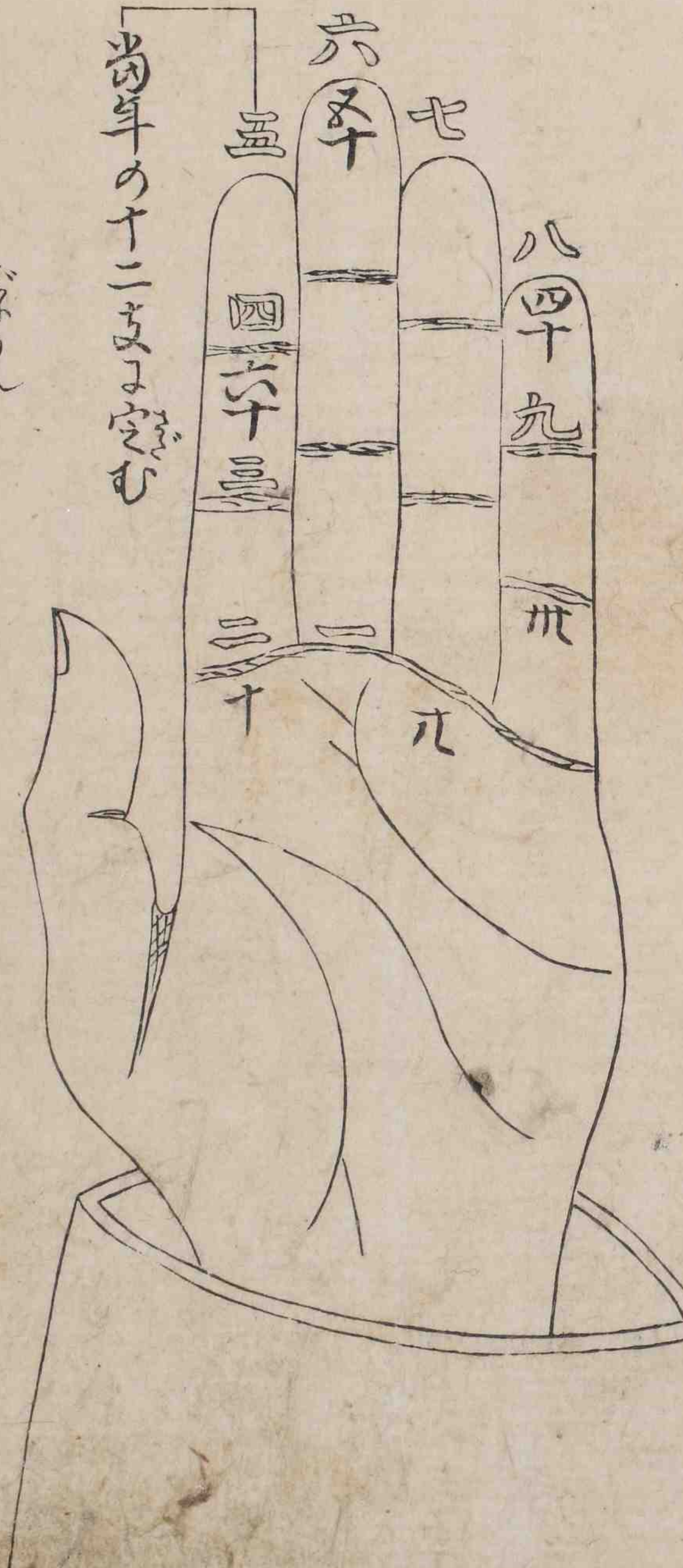
あてはまる年あるとあり

五 手にて人の十二支をあらわす

たとへば當年亥の手にて二十九歳はあらう人生年の十  
二支をい

法曰手の大とく人指ゆひのりとの筋を十と定め筋  
一つは茶うきより十たとかぞくたひなれり  
通一二三四五六七八九とかぞくたひなれり  
人さゆひのかしらと當年の亥と定めそれより順は亥  
子丑寅卯辰巳午未とある時ある未とあらう

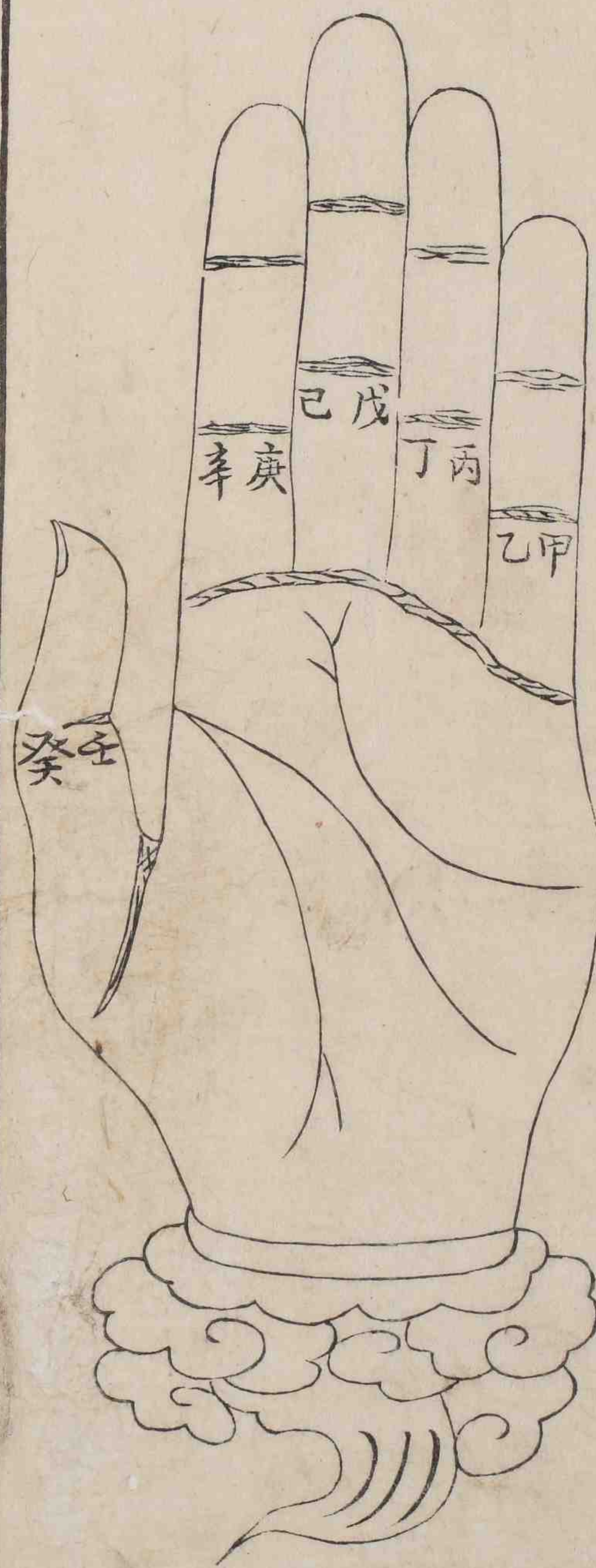
又あの手より通ふ亥子丑寅卯辰巳午未と人  
指ゆひのうらにあらうと取て甲乙丙丁戊己とあらう  
人指ゆひのかしらとと定めあらう



六 同十干をあらわす



たとへば當年癸の年より廿七は成人生年の十干と同  
 法曰癸のこゝろ乙のたふは卯乙丙丁の相攸とてこれを  
 相年の数と算すはくもすてすむるを當年の干れ  
 癸より逆よりてちり丁は當年也丁あるべしと  
 あり奇なきりのい當年の次乃年の干なり



七 人の生年乃又所とある事

たとへば甲子の年より人い何性をととふ

答曰金性

法曰左の指にて甲の一と子の一と合せて二を算るを  
 終の算は合せて金性と答るなりと合するなり  
 多し時みとすてわする数を用ゐるあり

甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉
戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未

終の算	一本	二金	三水	四火	五土
-----	----	----	----	----	----



八  
十子たりぬの事

残<sup>また</sup>りても基<sup>こゝろ</sup>にこそも相救九つ先の人は渡<sup>わた</sup>りていふ程<sup>ほど</sup>でも  
 人<sup>ひと</sup>もに手の内<sup>うち</sup>は掩<sup>おほ</sup>ておあられけ方<sup>かた</sup>よりと又<sup>また</sup>にきりておそ  
 そ方<sup>かた</sup>れ相救<sup>あひたす</sup>りとかきりてぬおあきする相救<sup>あひたす</sup>をすよあきそ  
 けよ三つあまさんといふて物救<sup>ものたす</sup>十三持<sup>も</sup>て出<sup>で</sup>る也<sup>なり</sup>十二持<sup>も</sup>てお  
 といふつあまさんといふあういくつあきも同<sup>おなひ</sup>なり

九  
さうささの事

たとひ銭二十文貸して一文のうゑと二文のうゑと一文くふ  
さアさアと声こゑをうけてゐる時を声救を四けんも船ふねも着て家いえに  
十八声うへ一文の方まへより六文まで一と答こたへふ也たのみのどろ

一父の方 ○ ○ ○ ○ ○

二方

法曰声教を倍して二十六と成け内元三十文と引減六文と

一文の方の救といふ也。是を義救といふ文あり。又元  
三十文の内、声救十八を引、勢<sup>ツ</sup>十二を倍<sup>ス</sup>して廿四文と  
する。と一文の方の救といふを以て。

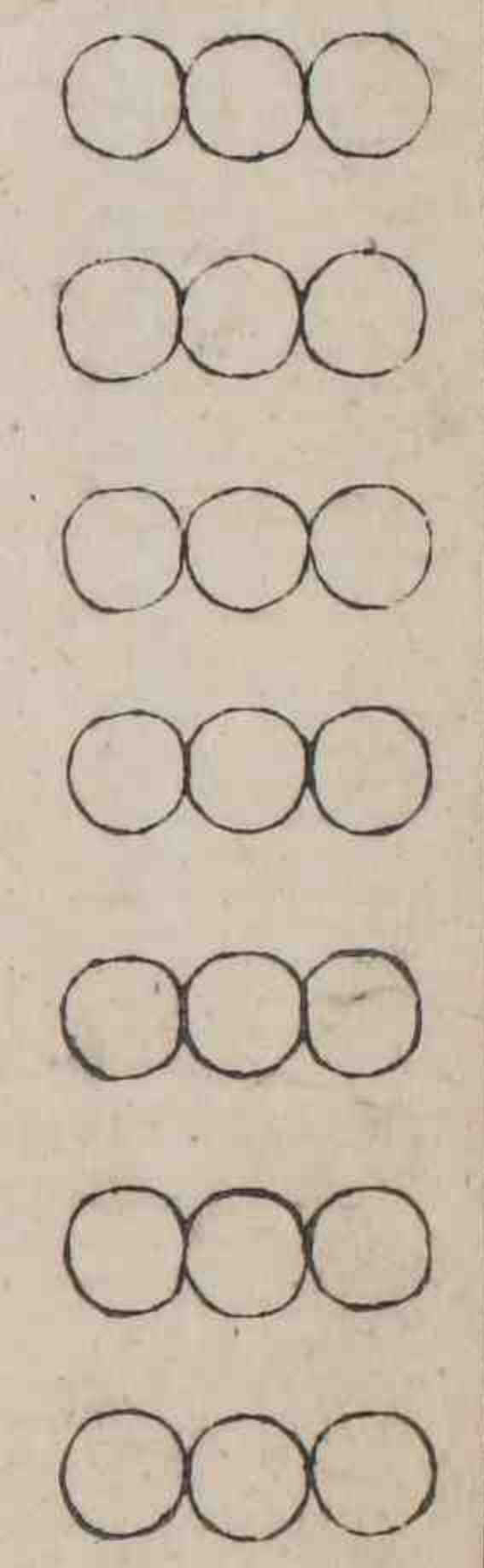
十 同 一 と 三 と に 互 なる 事

たとへばいふ救きう三十そ後ご々々十六じふ声こゑありいづくつつめめ方かた九くつつといふいふべし

一ツの方 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○



三つの方

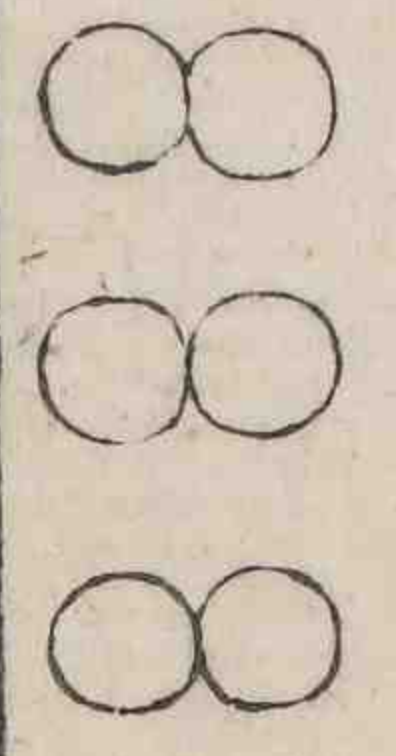


法曰声数十六は三とくけて四十八とある内元三十を引けり  
 十八と三つよりて二つの方九つといふ也又元三十の内づて  
 声数十六を引けり十四は三とくけて四十二とあると二つは  
 割て二十一と三つの方の数といふをい

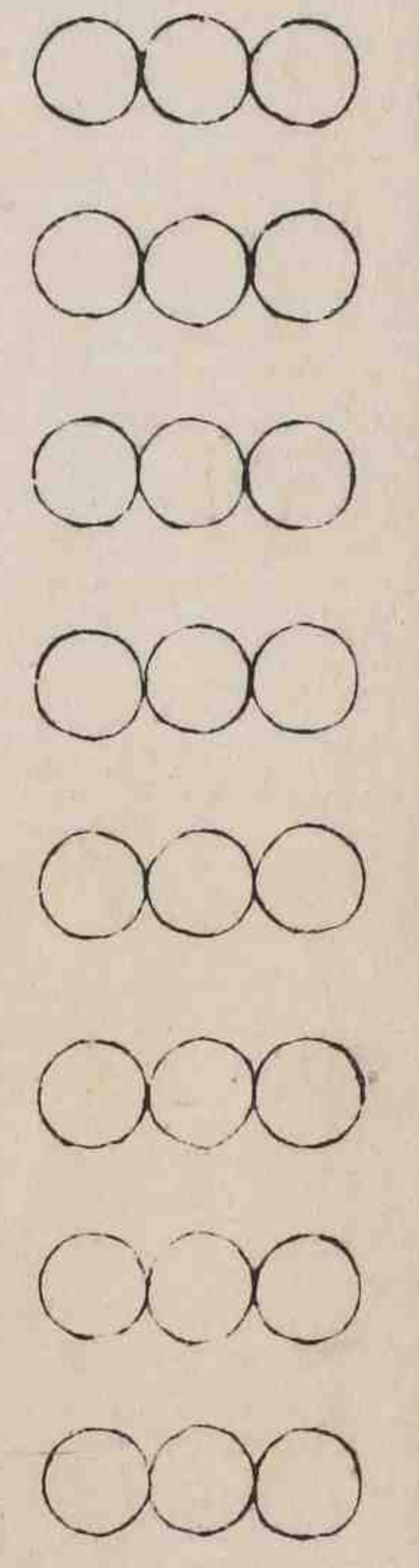
十一 同二と三とふくつる事

たふむる数三十後して十一声なるが二つの方六といふべ  
 いれとい

二つの方



三つの方



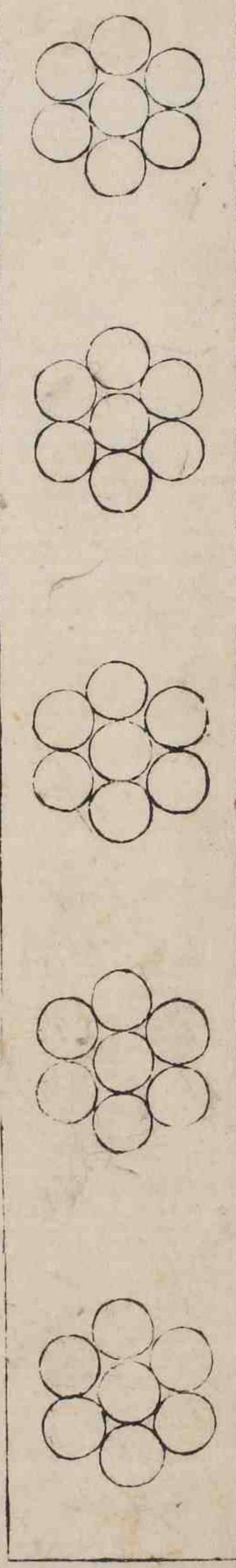
法曰声数三とくけて三十三とある内元三十を引けり  
 三と倍して二つの方六といふ也又声数を倍して九とある  
 元三十の内より引けり八は三とくけて廿四とあると二つの  
 方といふをい

十二 組むけと云算の事又添えといふ

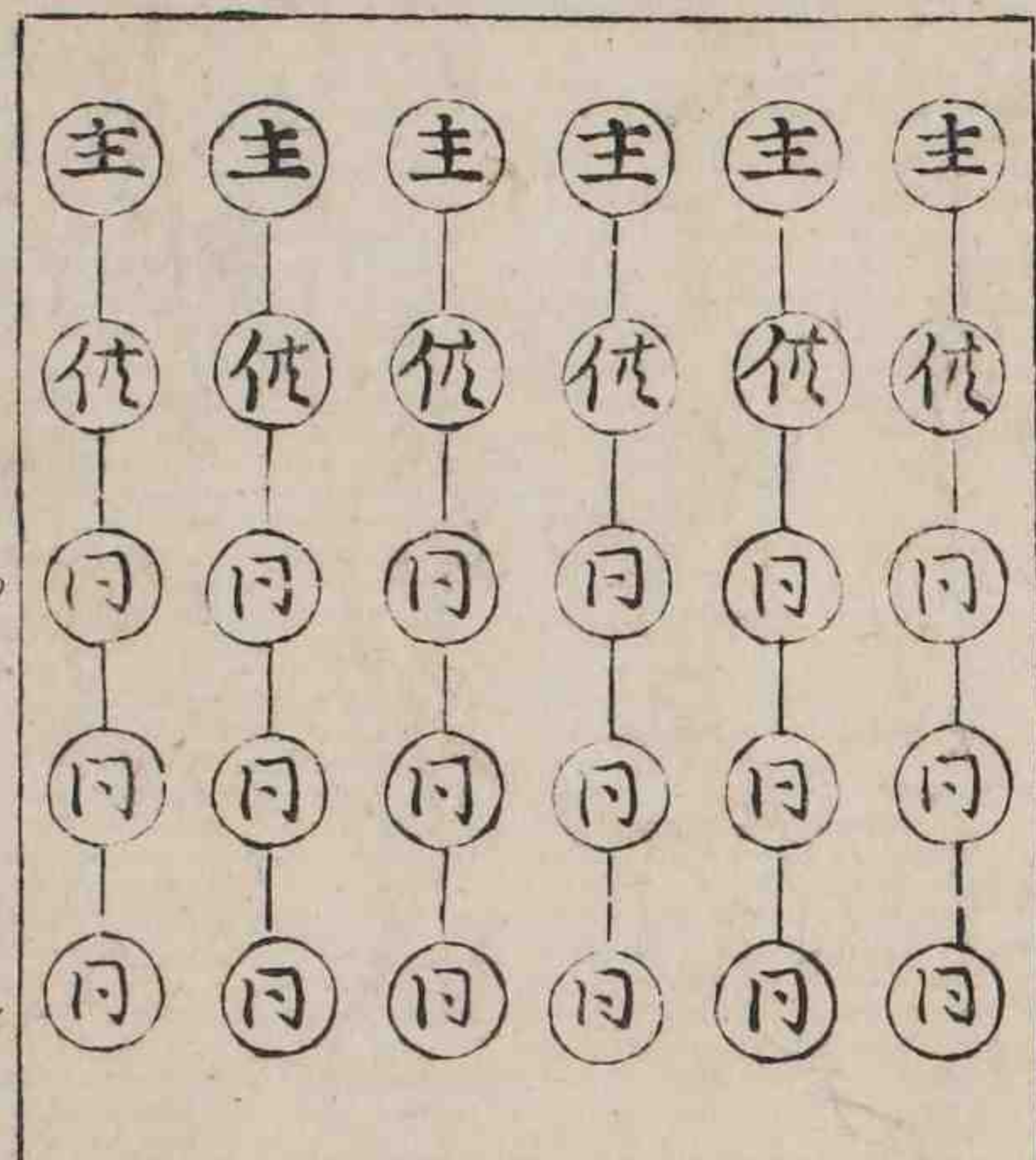
ふ数いれりといふに数つ幾組をちうべさるるを組数たといふ  
 む組といふを算するをわきまてき組を内を組と云ふ人組  
 少る組をつふして下人組と名付させぬる人組の内より



一人下人組へいささせ給ふ人より下人組を供へ付するあり  
 或は狭お持或は履衣又は別黨なりてきて五人一人は  
 四人に付ありけり人といふもどめ又組といへば必供人  
 六組といへば必供五人はなり畢竟組敷よりつてくる  
 付々也さて付仕舞の時を給ふ下人乃殺必細の組敷の  
 とをり又組といへば五人六組といへば五人あるものあり  
 今もどめ又組あるゆへ一人の長崎へ使より一人を大坂へ  
 賞物より一人の愛宕へ代よりさせ給ふ二人のぬき居など  
 いふやうにして組敷の都合はあふ様云々たといは  
 ちりけり又組の五人組なり



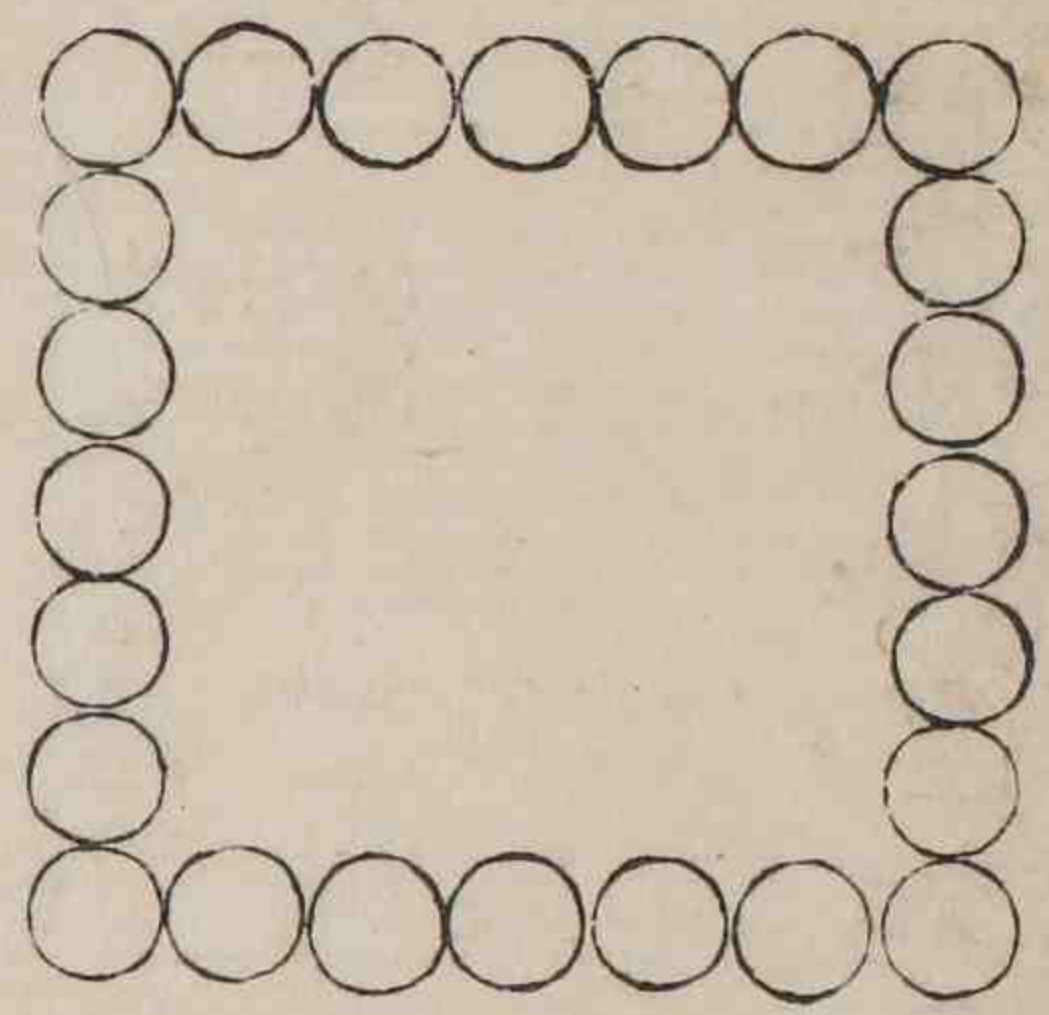
いふ人の内より一人下人よりして給ふ二人を五人とさどめけ  
 六つをさるあつて供五人に付れがあとに下人組五人  
 ありたの家のどと



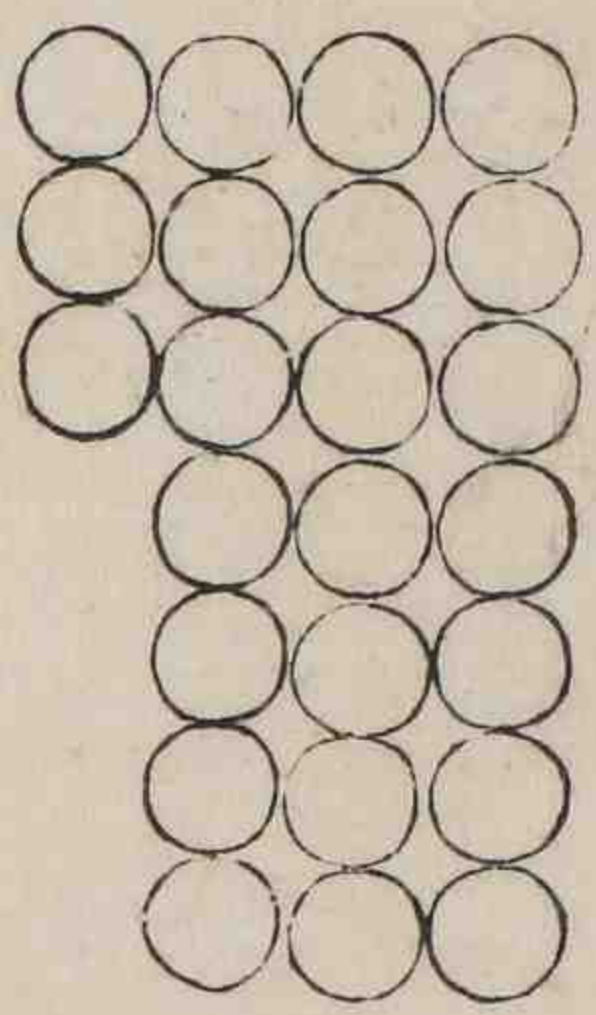
十三 薬師算の事

給ふ五人 ○ ○ ○ ○ ○  
 又同じ四組下人二組の五人の時五人の内  
 二人を下人よりして供を四つ付し給ふ  
 三人を下人よりし給ふ五人を数えてあは





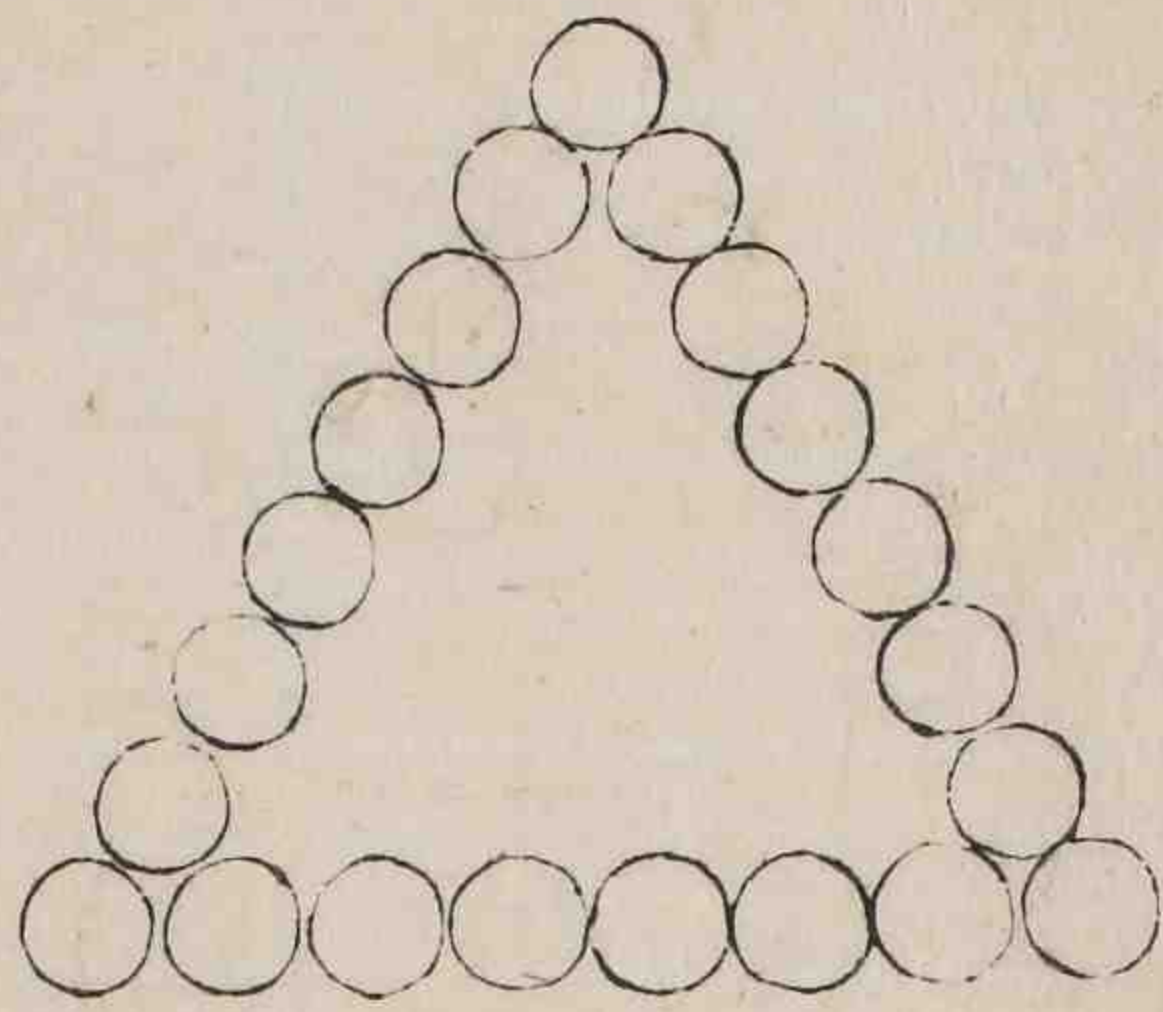
めはいくつに救ふ人も甲種で四方にあるて救  
三方をさづけて又たの處のとも一方よりさ  
さうする時は救ふべきさうして三つありあるを  
救ふ二十四と答ふる也



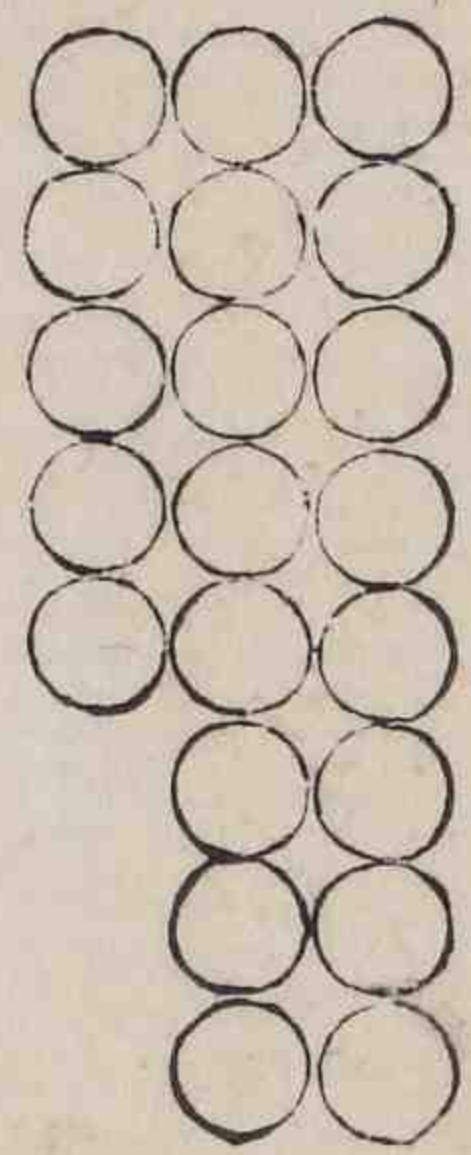
法曰一十二を四つはの算用よりして十二を  
 成是は定法十二を加へて二十四と答ありあり  
 又すなりと云はれ十二を四つと答へ一塵劫  
 記は百二十といふあやまり也又すは十二と  
 いふ時ハハつとも答ふなり

十四

同三角小なり如事



めいはいくつはぬもに救つ三角あるて  
板二方とらうて又たのちのち一方とらうて  
ちうづう時バ救をいふてめいありきうれい  
惣救二千一と答うあり



法曰ちうと二つを三つ法くの算用よりて  
 十とあるは不定法三つをちうとかて二十と云也  
 又ちちあつといふ時六つと云ち智恵ち車ちふ  
 六十といふを得ちうとなり又ちうとといふ  
 時三つとも云ち

十五

同五角子ありぬき







又ハ及ヅヨレバナラズモセ及ヅヨレバミナラズモといふこと

答云人救六人  
布救三千七

法曰たゝぬ十一の内たゝぬめつをりてはあまを八救とさるゝ  
 け救は後の七をさるゝは四十二反とぬべ内たゝぬめをりて  
 餘は三十を反とぬ也

又七及づくられバ九及あまゝハ及つわれバ三及あまゝといふと紀

答曰人救六人  
布救五十人

法曰あまの九つの内あまの三つを引て残る六を人救と云ふこ  
け救ふと云ふあまの七を残るれば四十二と云ふ是へあまの九反を

くろくそく又十五と書る也

十七  
御算と云事

[illegible]

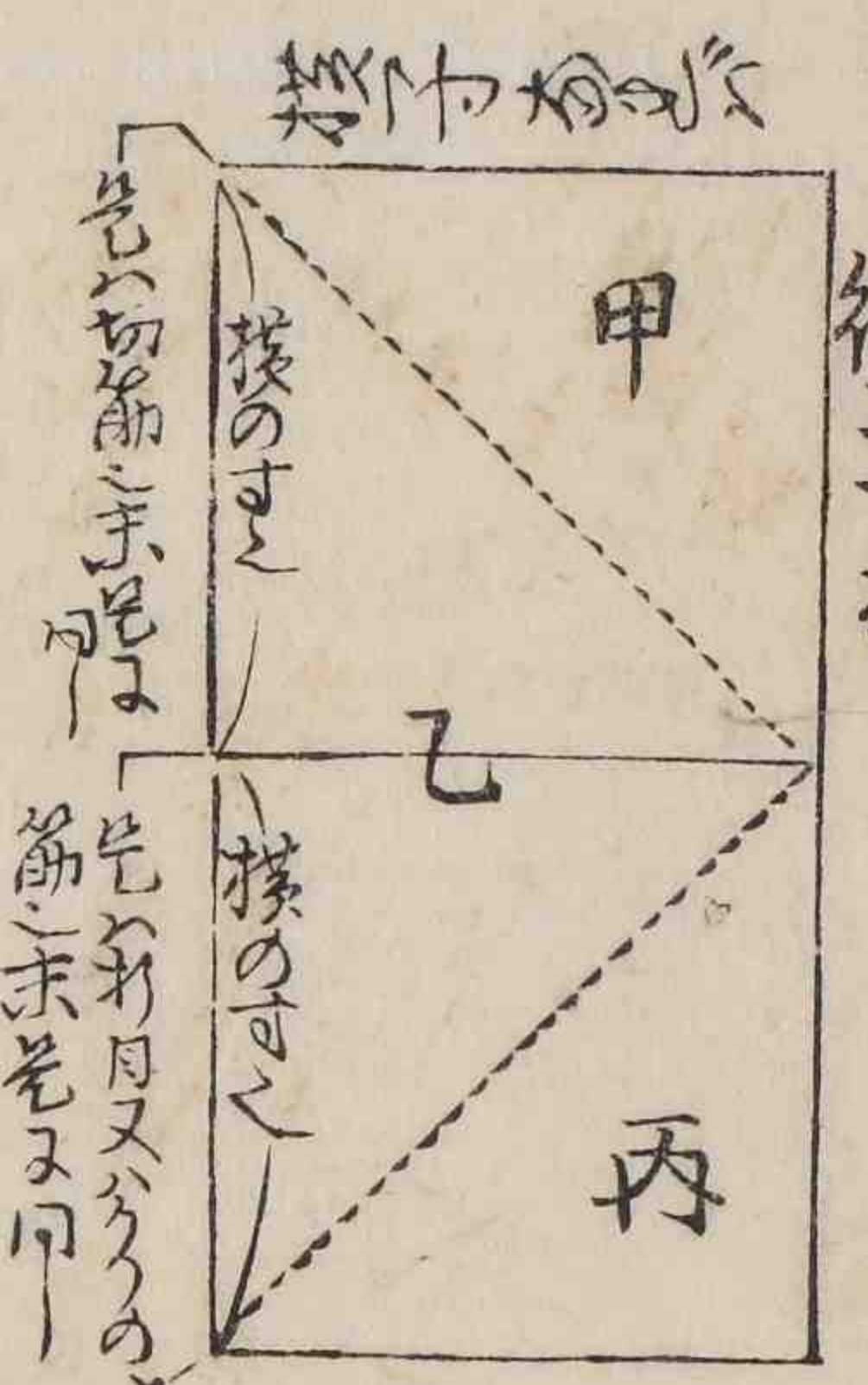


法曰ふいの十つは定法七をくへて十八と答ふる也又あ方  
 もいづがくしてありける時の後日よ十四加へて答ふべし

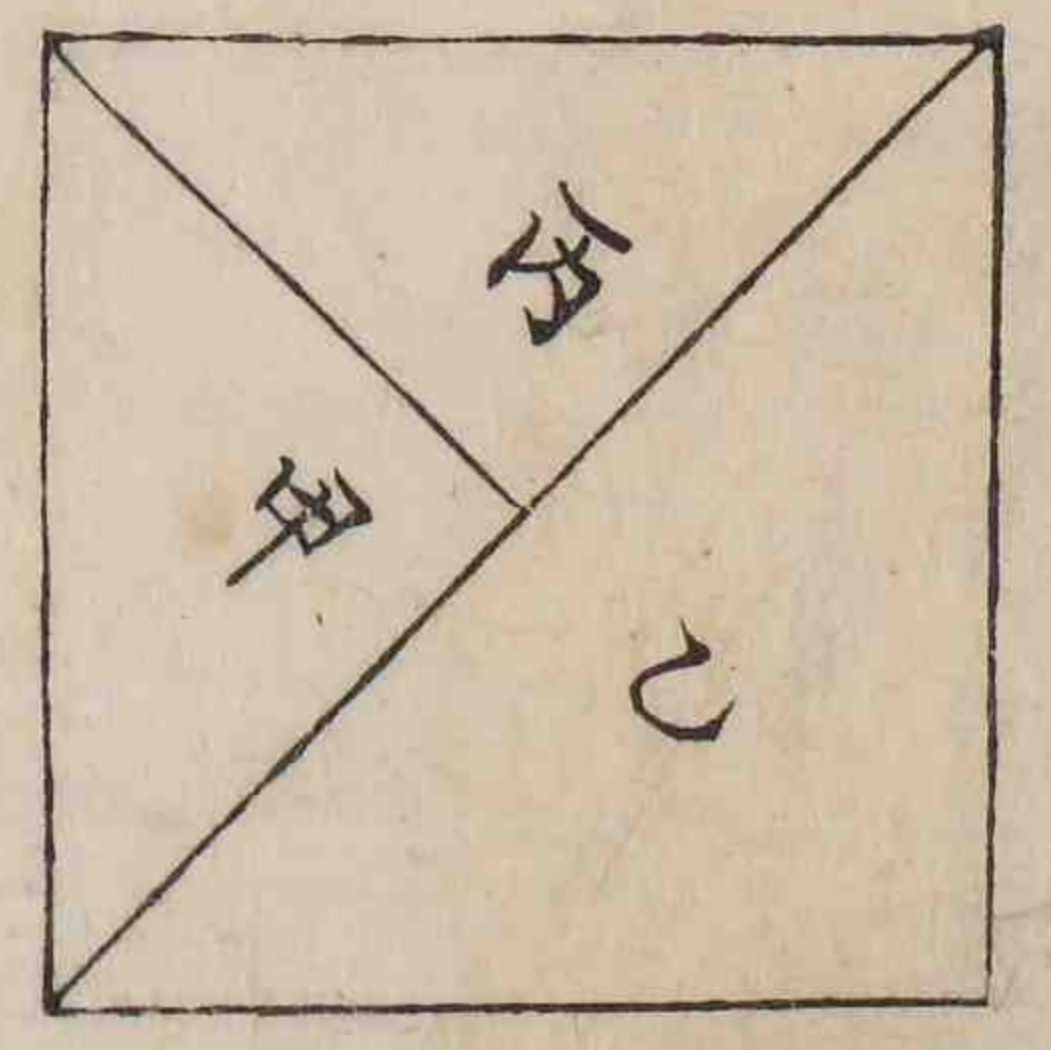
十八 裁合物の事 十やヶ條

たとへば横一倍を縦にあら紙と四方に糸垂すたちやれ事

縦二寸あり

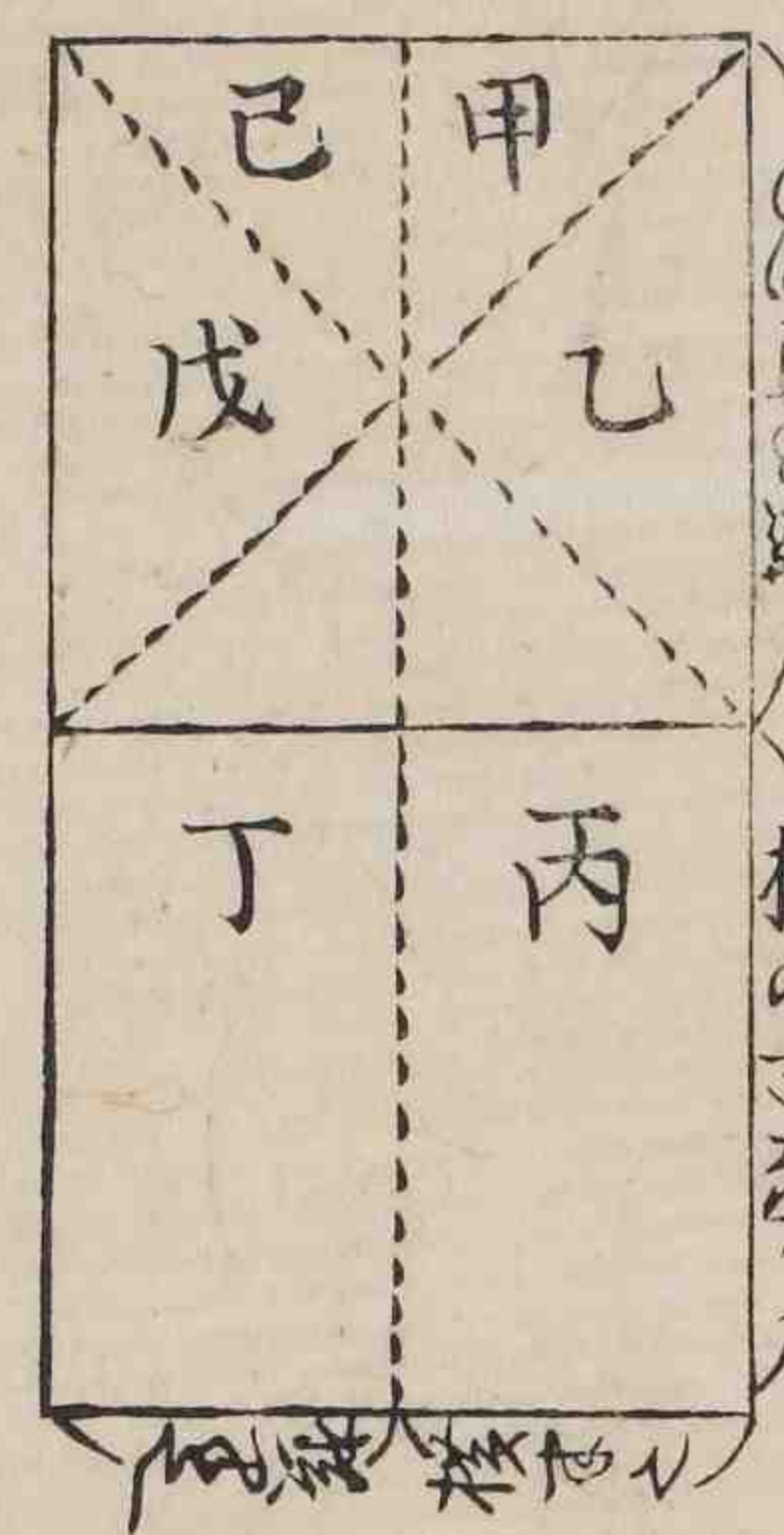


あられ筋より  
 切て下の糸乃  
 どもなるゆゑ也



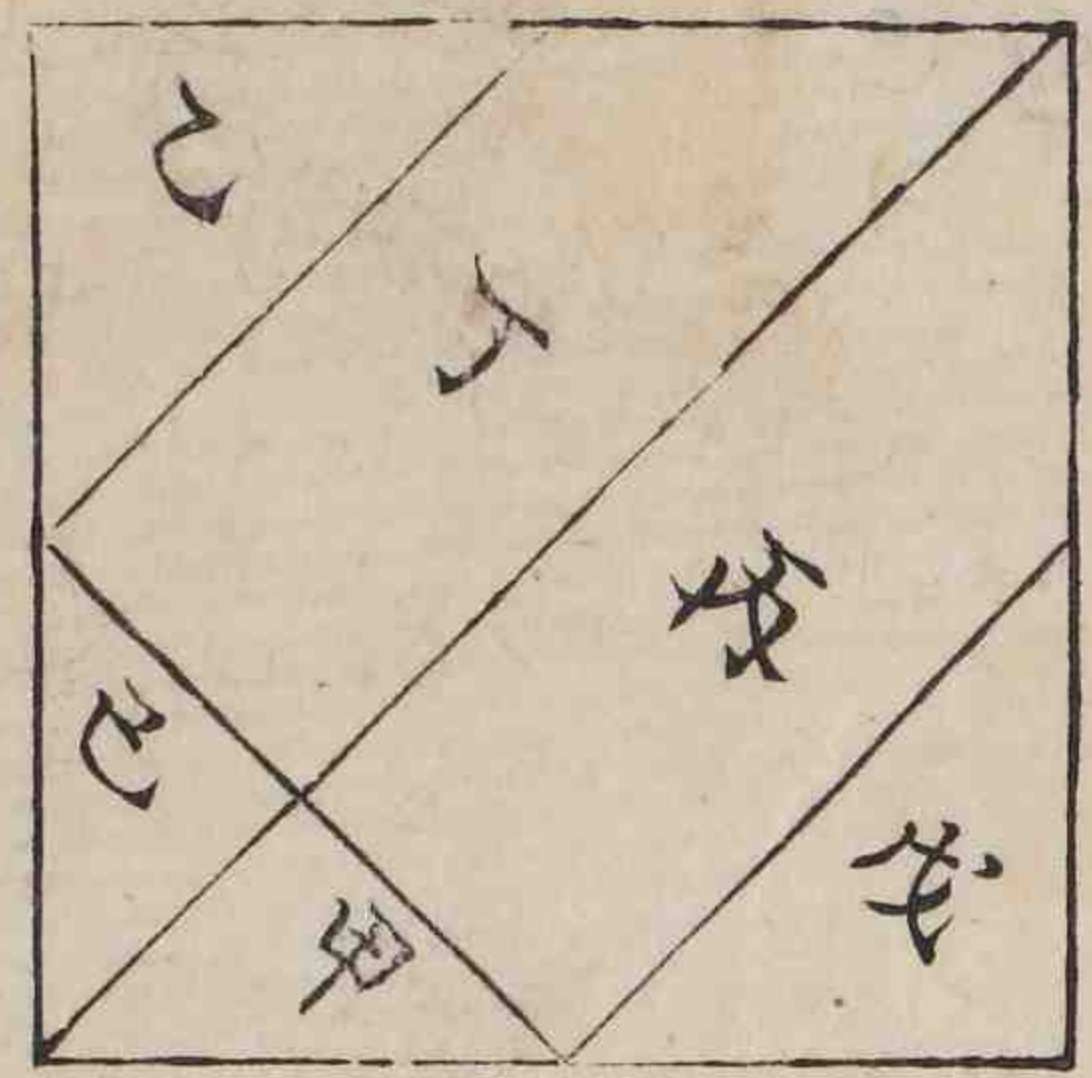
又たの紙といふこと切ぬ四方よと鱗形ふとさるはぐりふと  
 ぐぎぬとよと切ぬといひあらふと六とよはぬあらひぐりふ

あつて見合をる

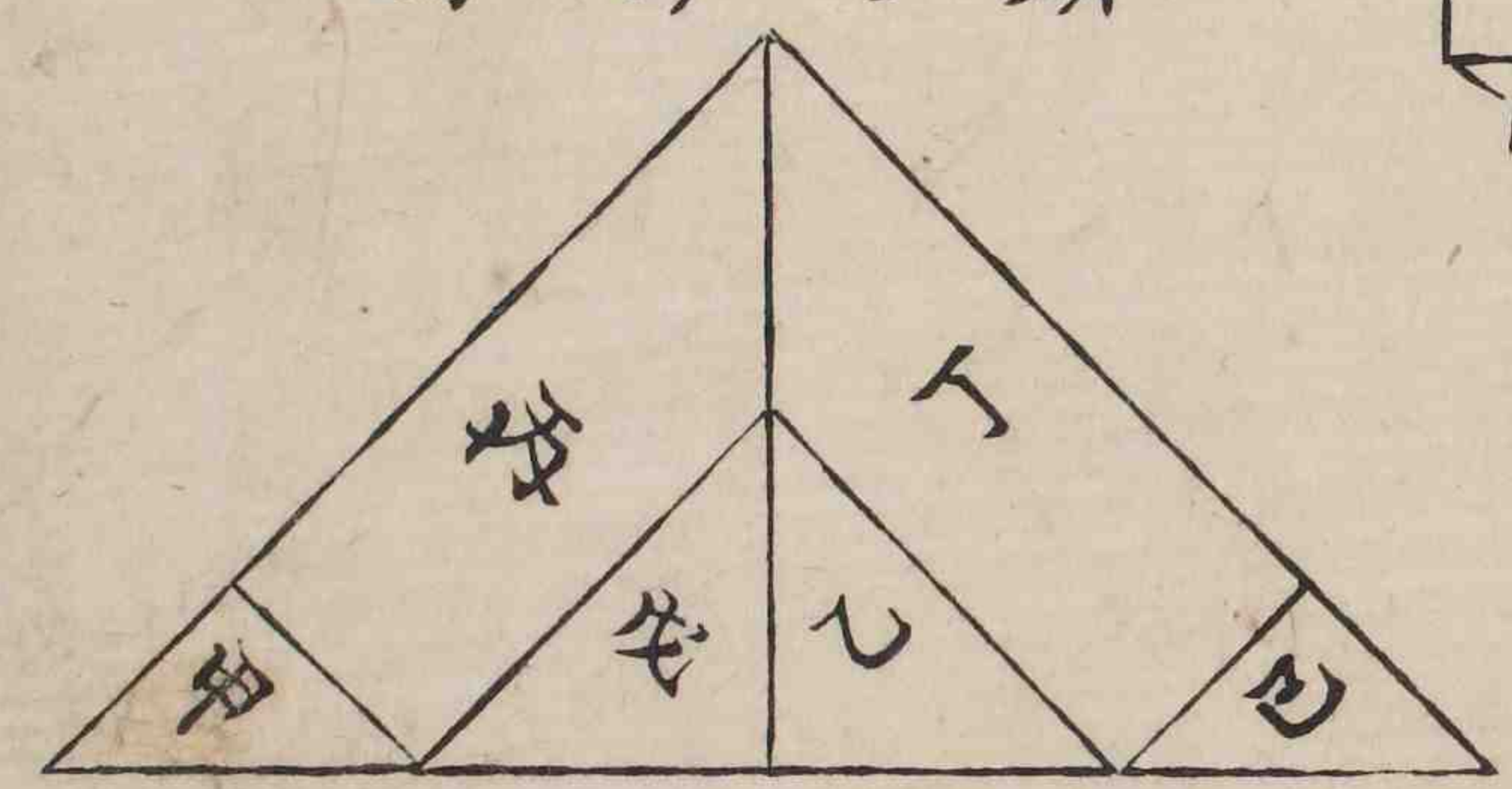


かめとさるれ筋より切  
 いづとよあらぬとたのど

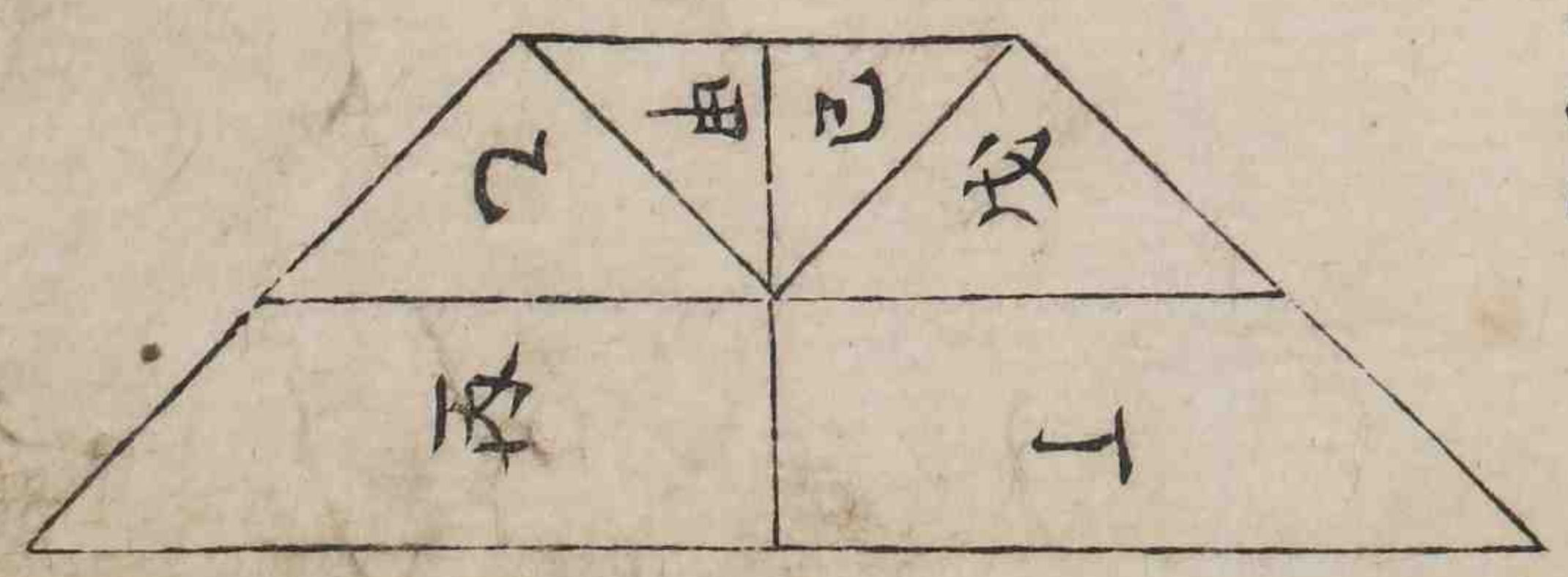
四の方の



鱗形の



とるはての



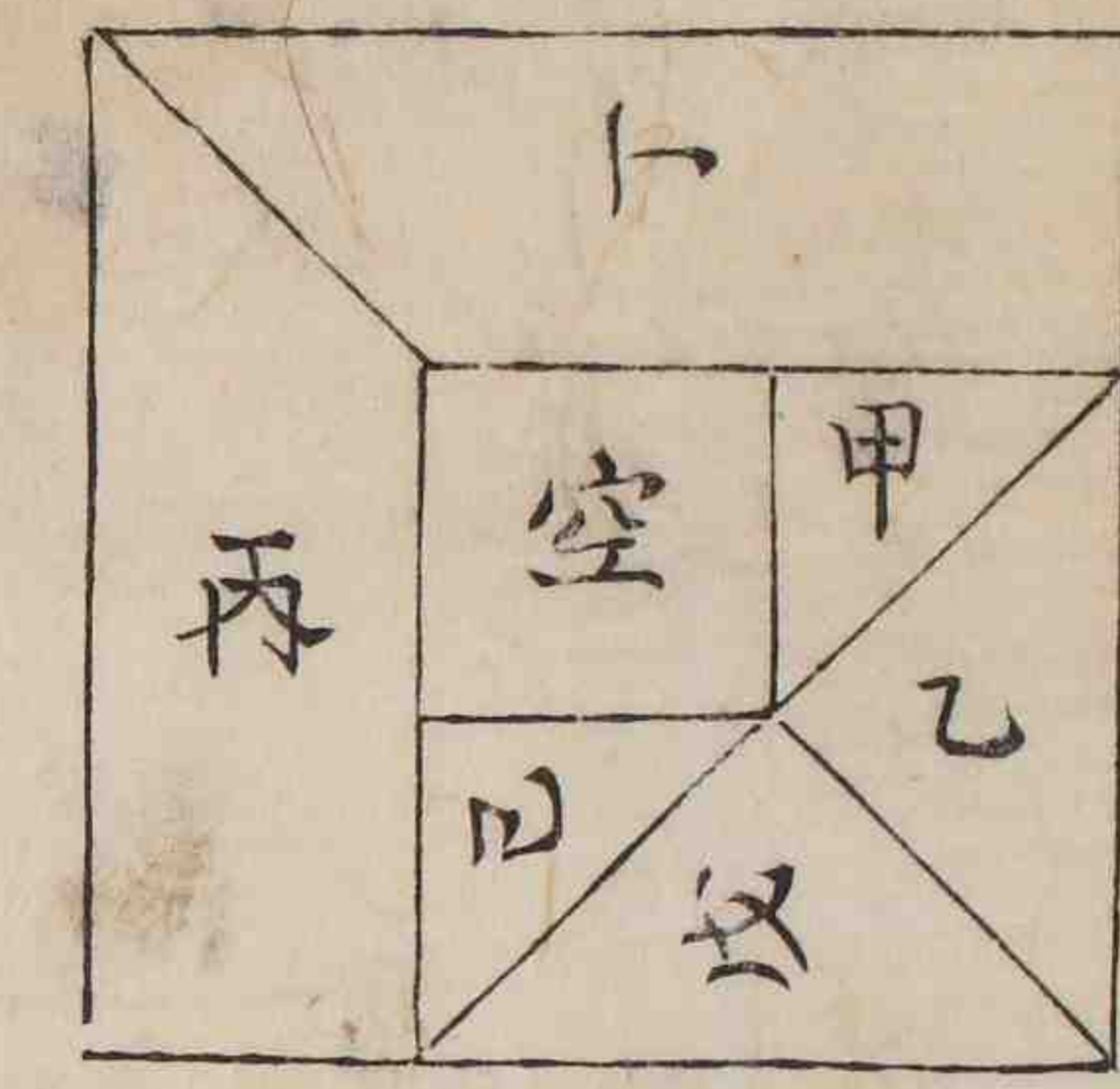
紙又紙

十八

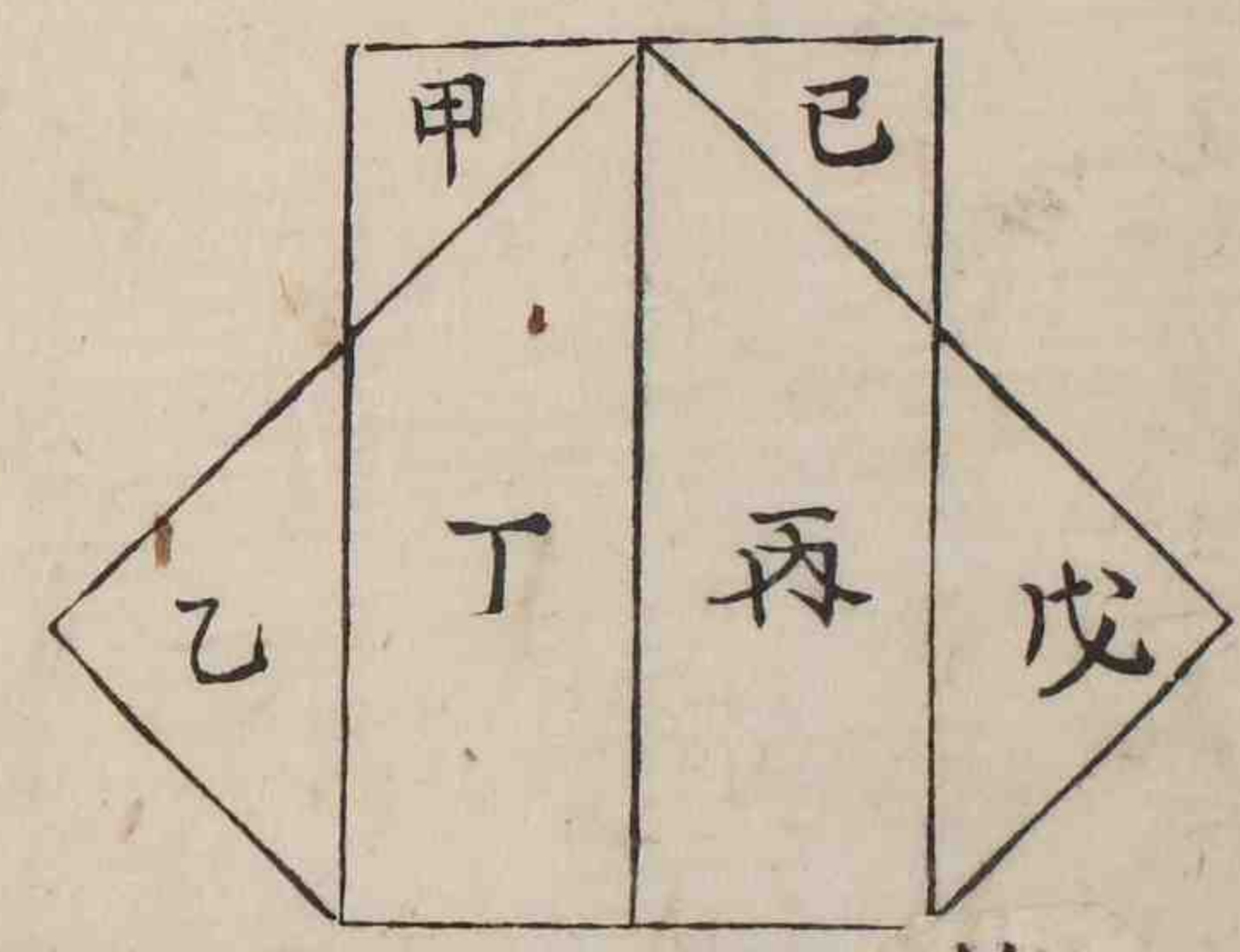


門外漢

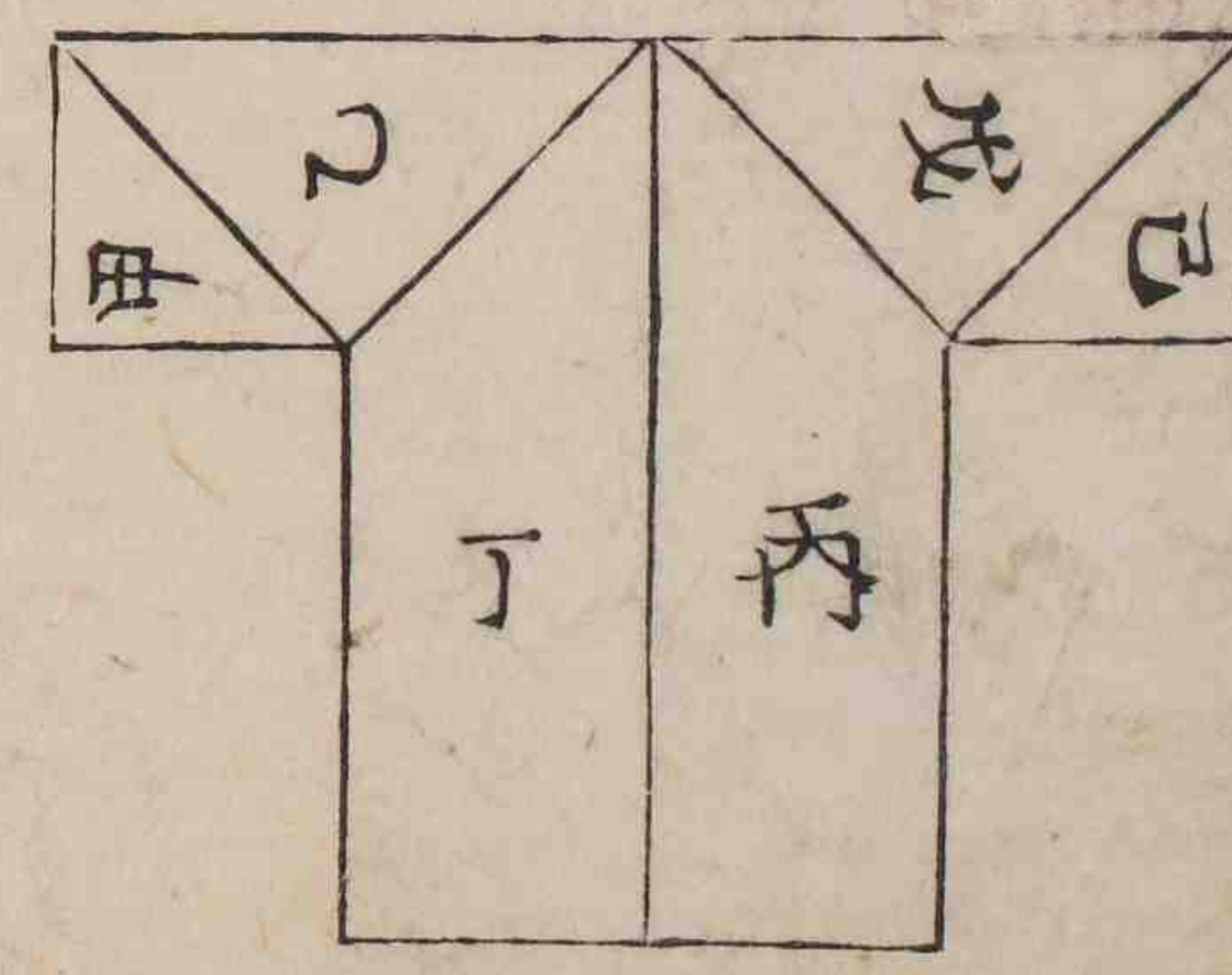
くねるの図



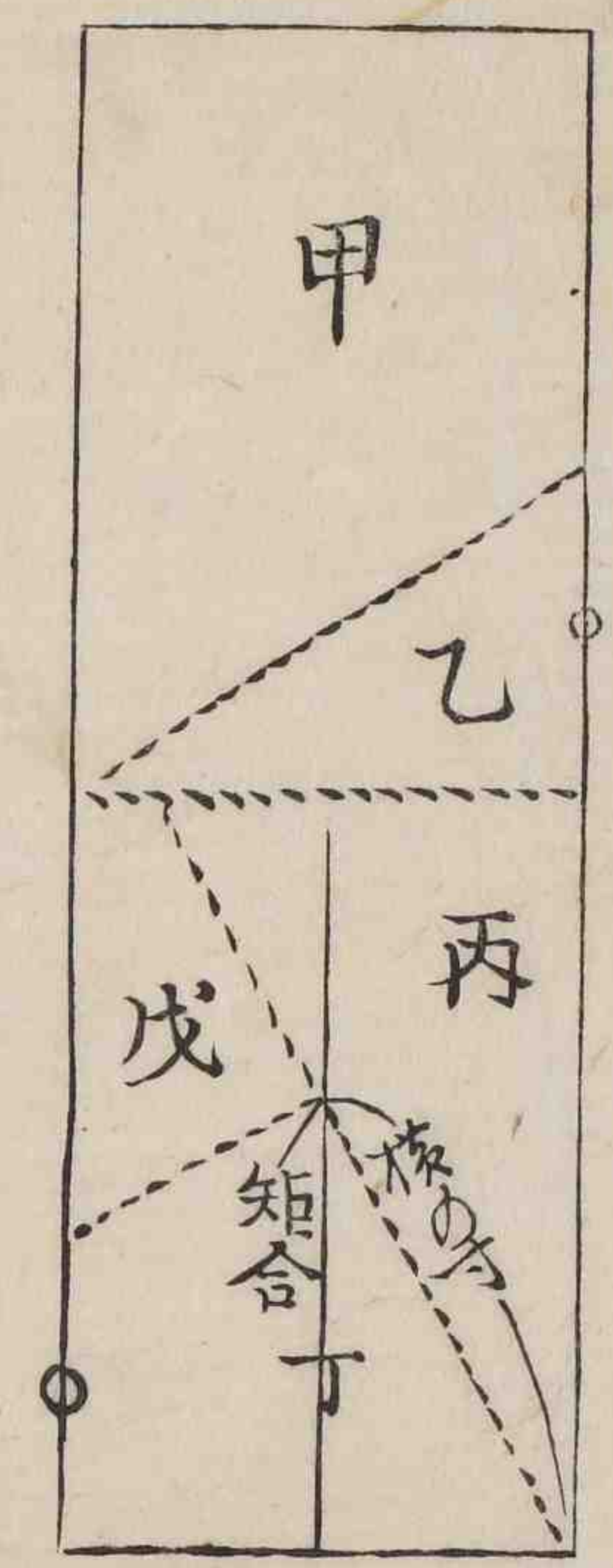
切筋の図



雛形の図



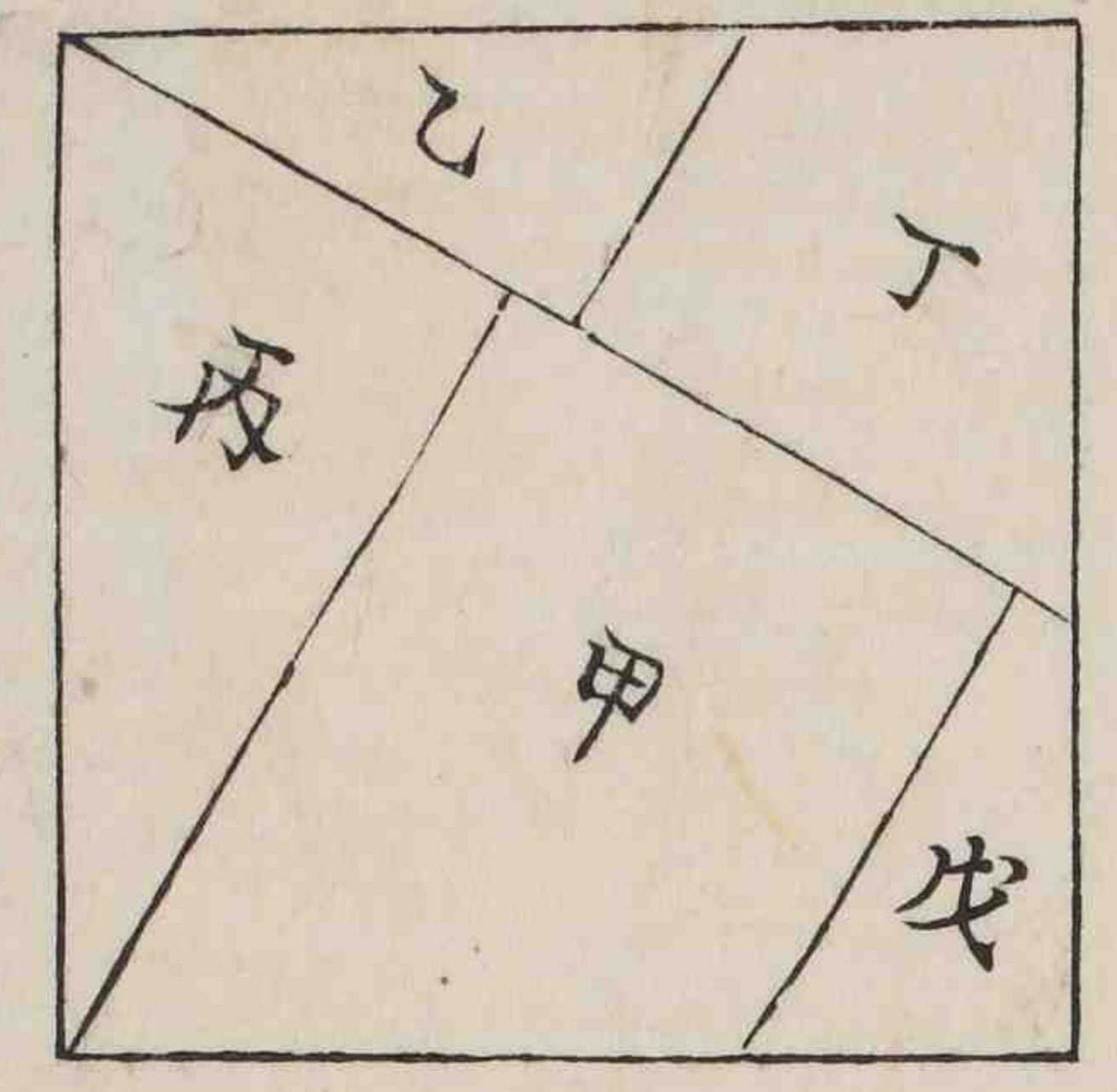
たとえば横三倍を縦より紙を四方にあらわすならやれ幸



寸をあてそ筋ありよの方へとたの方へと豊は合せて

法曰先と中の筋より横より  
切てそつと又縦よりおろ  
そ筋へと下のたの角へと横の

図のどく切あり板下の丸の寸ととりてよの丸の面  
そつと切てたの図のどく切あり



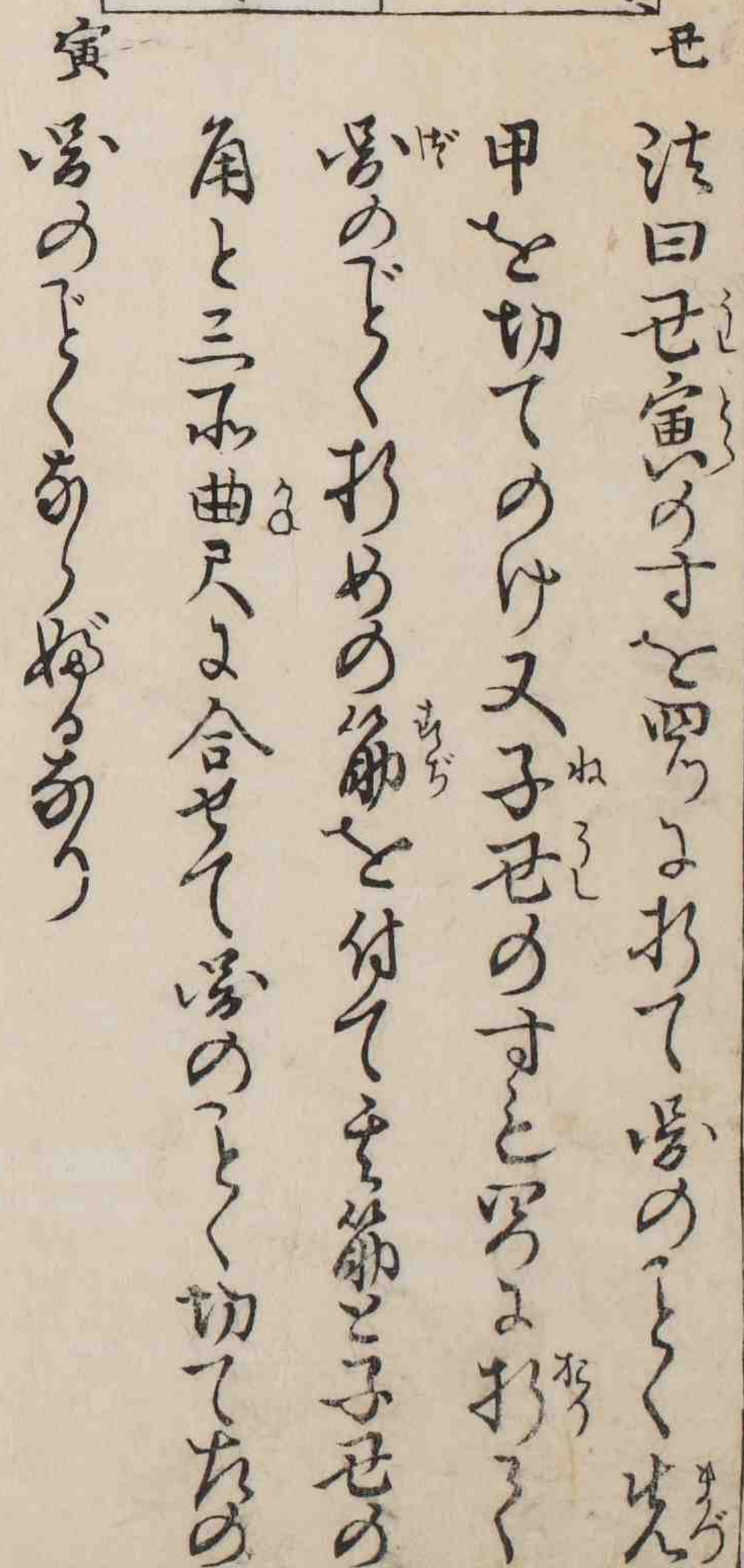
かつてのどく切あり

たとへ四方の紙と図のどく切あり  
そつと切てたの図のどく切あり

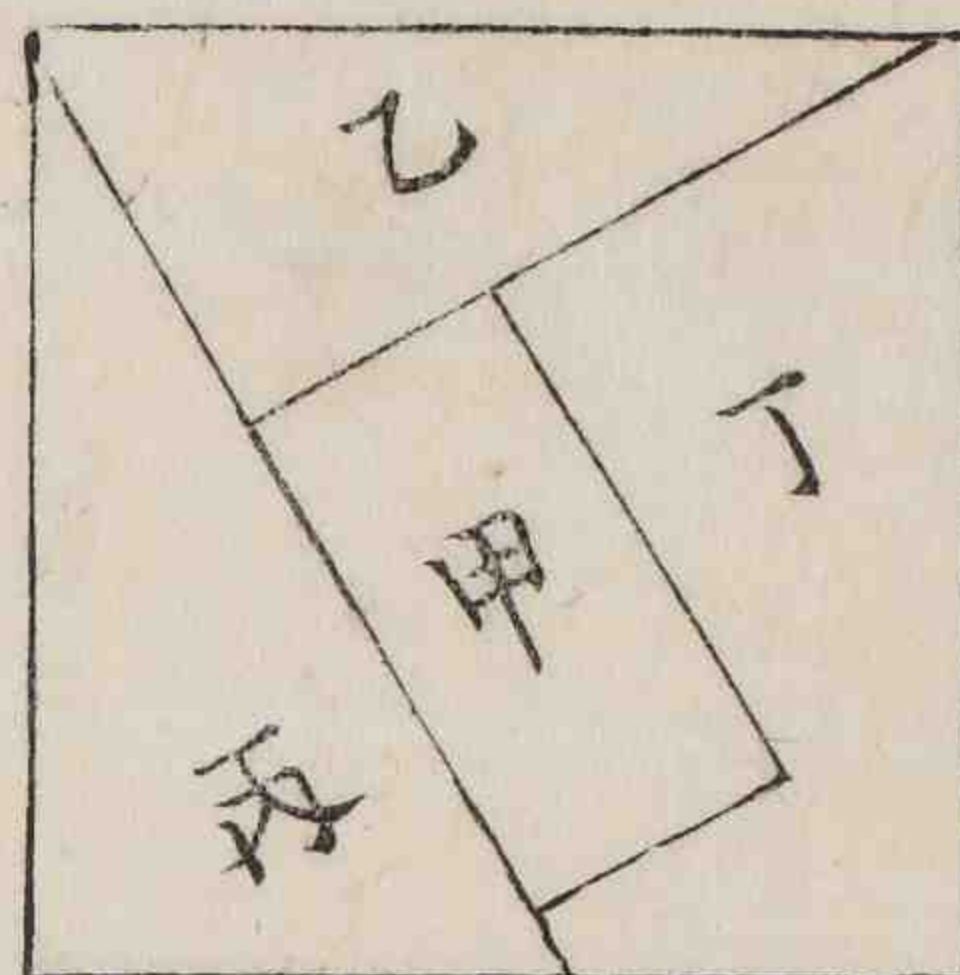
門外漢

門外漢

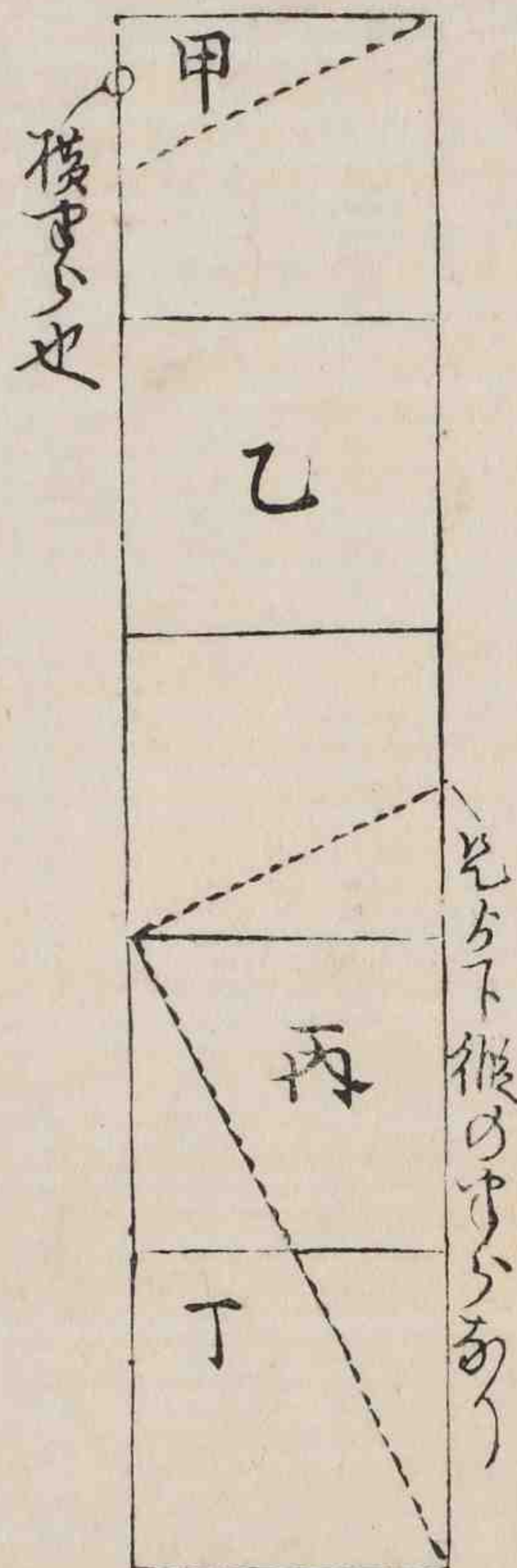




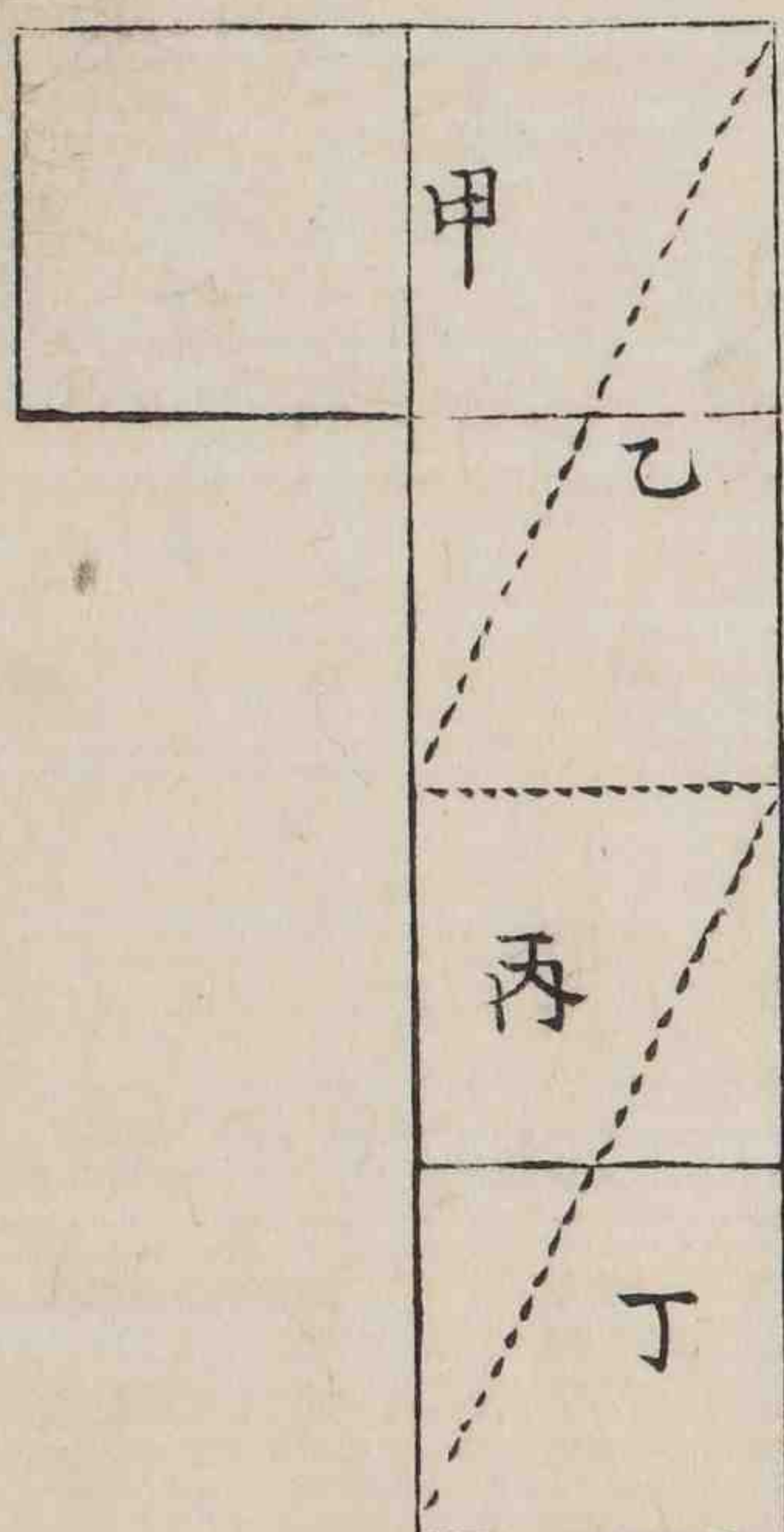
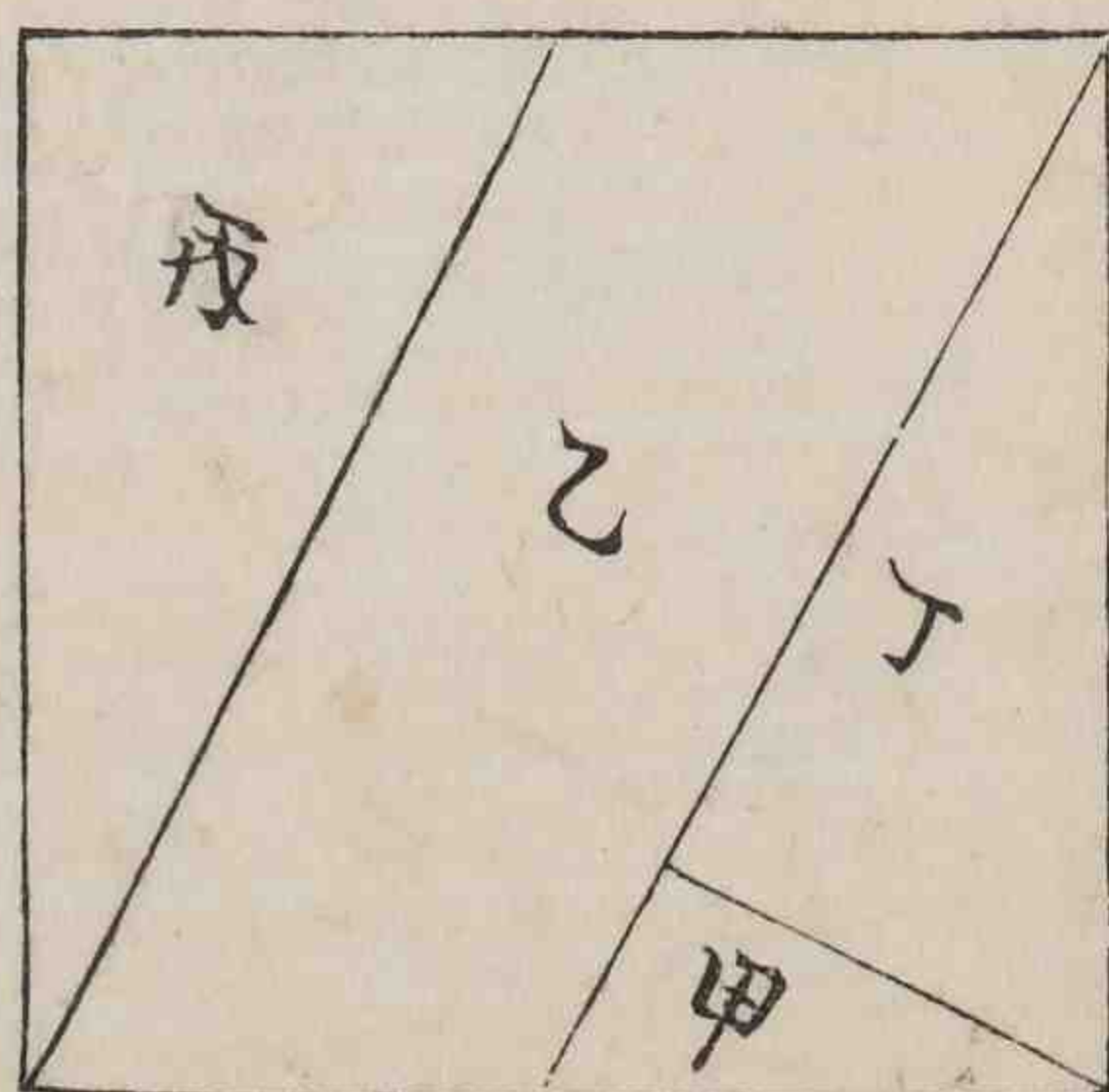
かゝるでうある



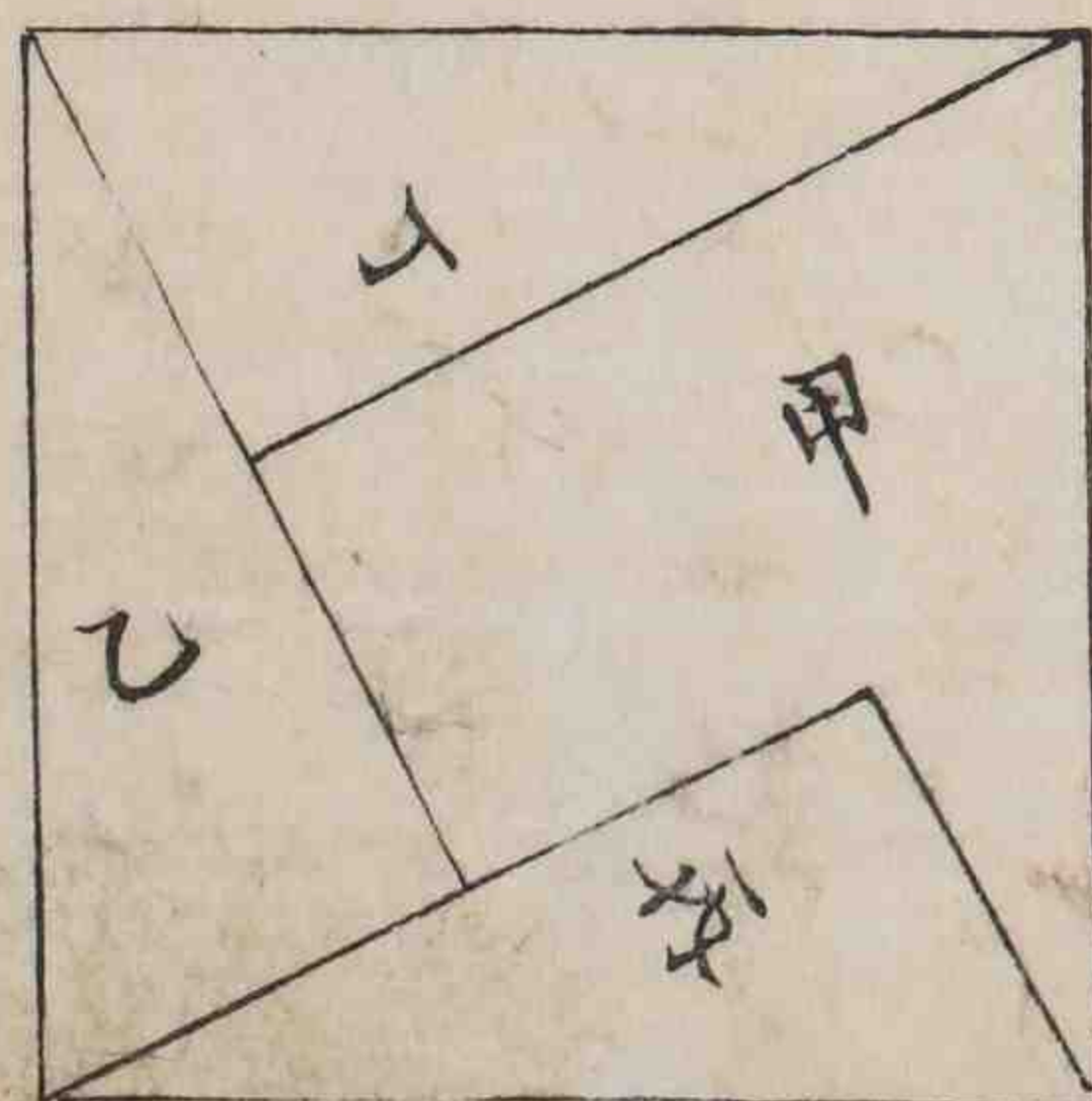
たとへば横又増倍を縦とある所と西方よりなる等切りの事



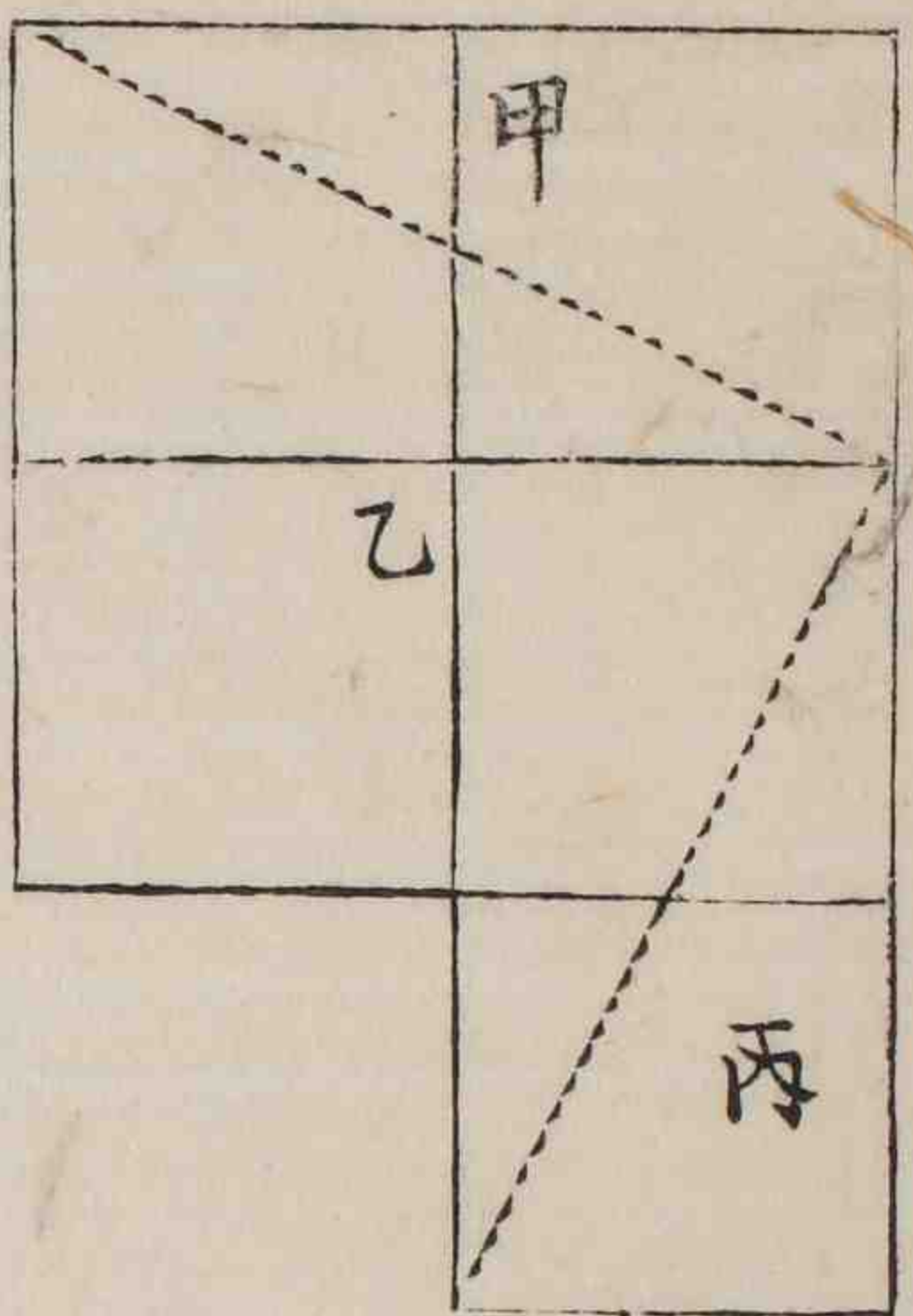
大乃下の筋より切て下れ雲のしるきゆき



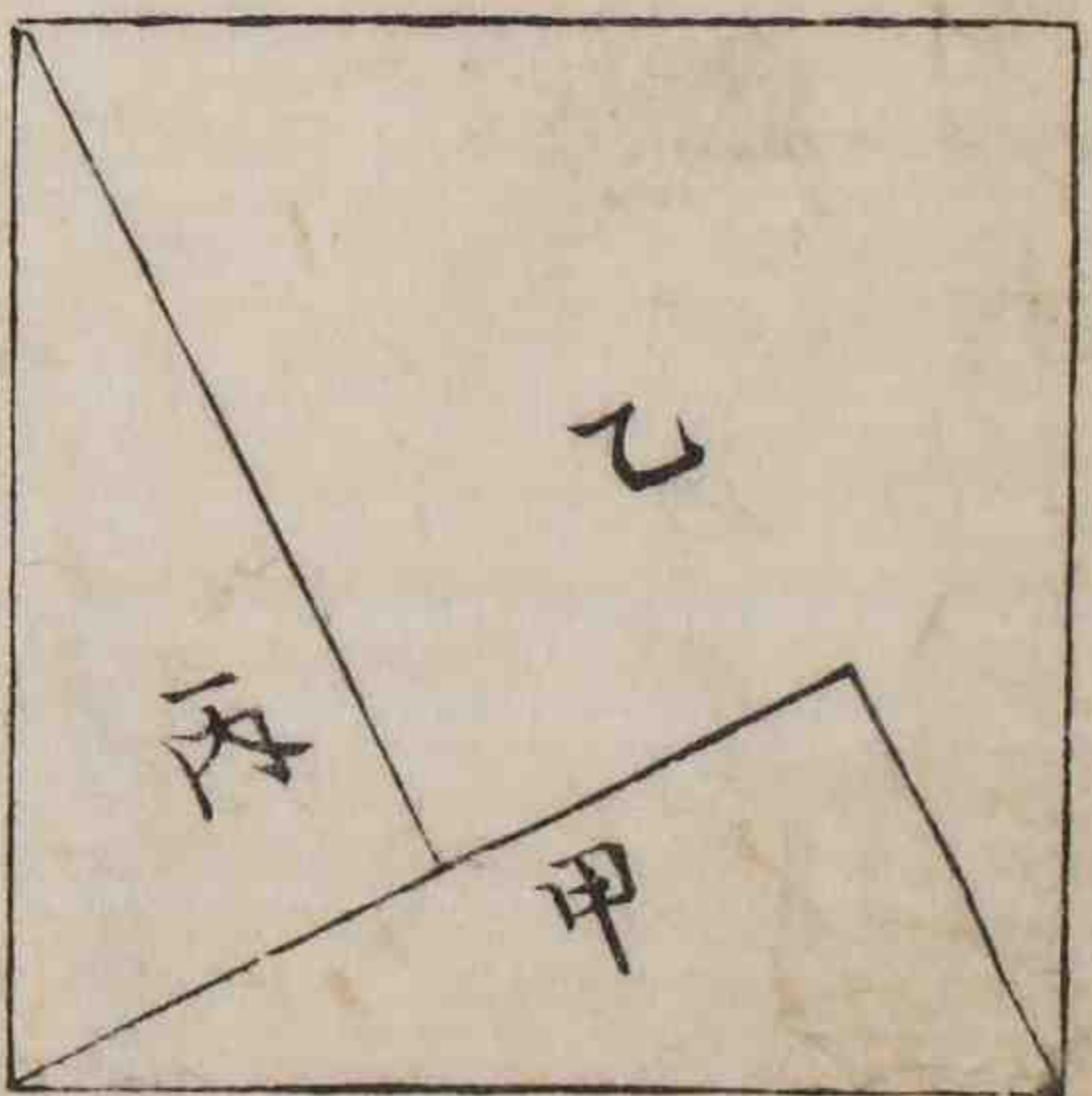
又たのすゝめ  
めいの紙を  
筋を切て  
下の墨の  
あゝぬ



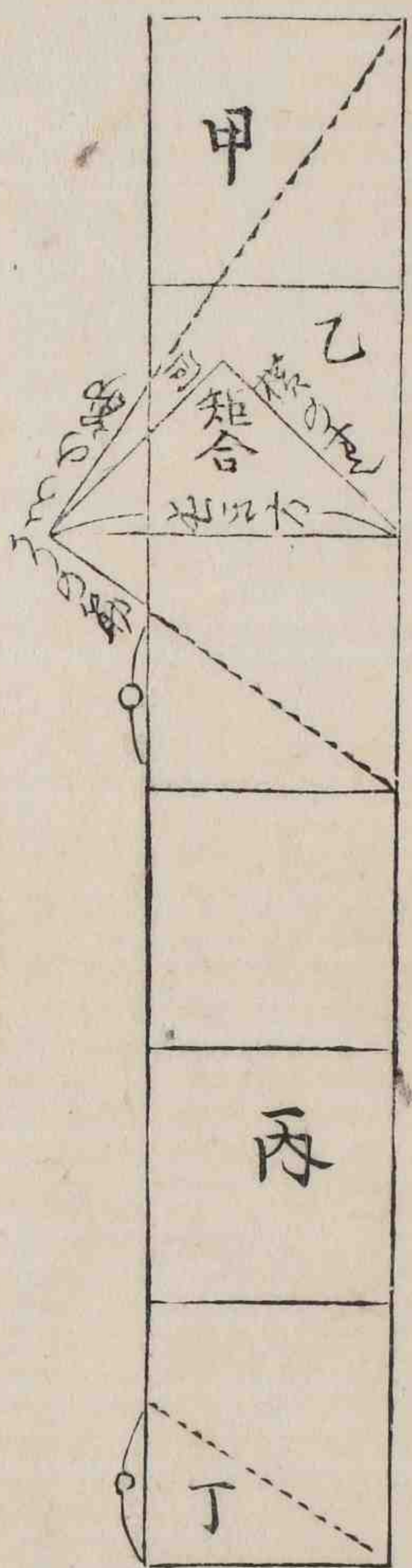




又たのすにてかくの  
 大とき紙の下の筋  
 より切て下の方の  
 ところありぬるあり

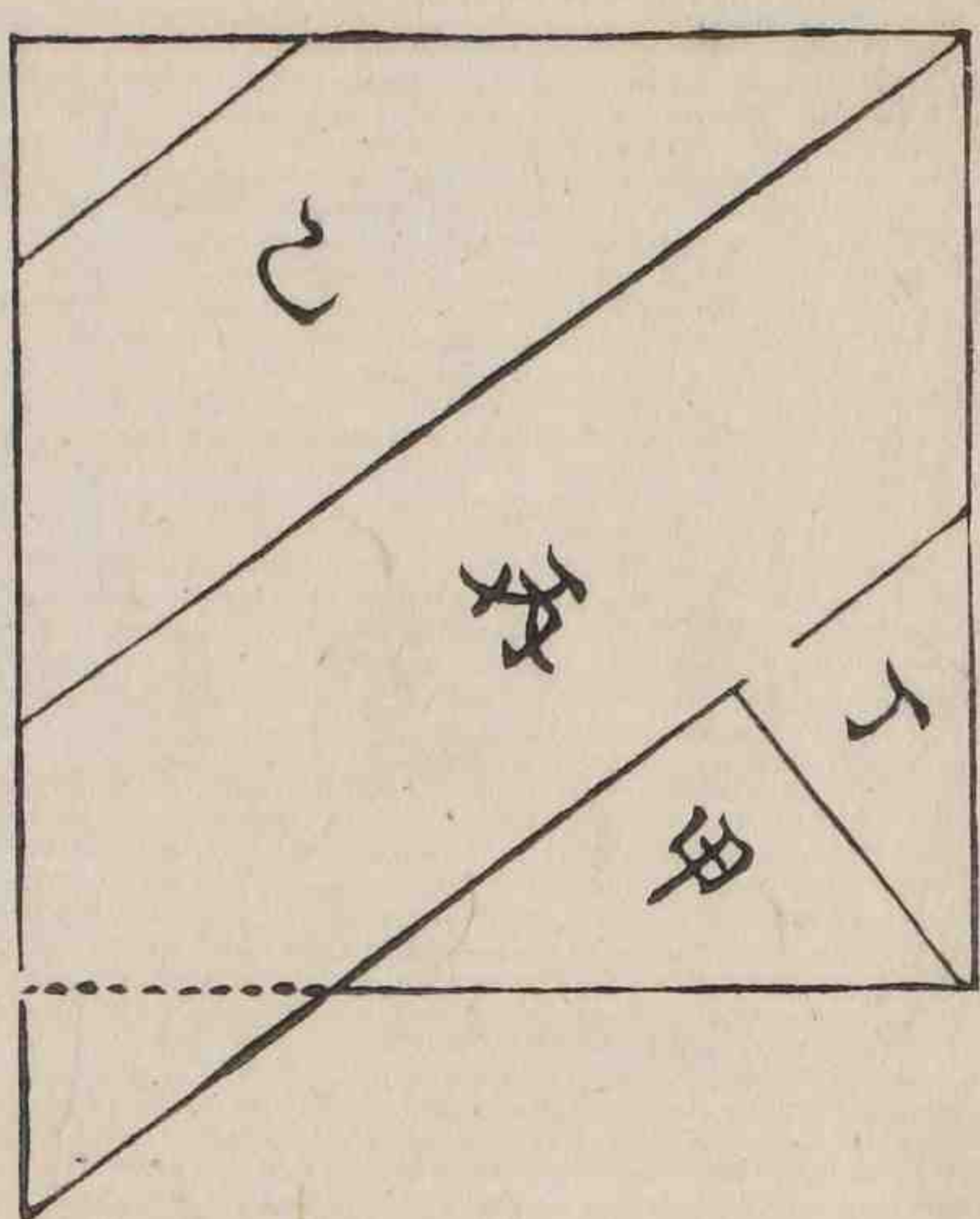


たとへば横六増倍と長ふきる紙と四方よりなる紙をたらしめし事

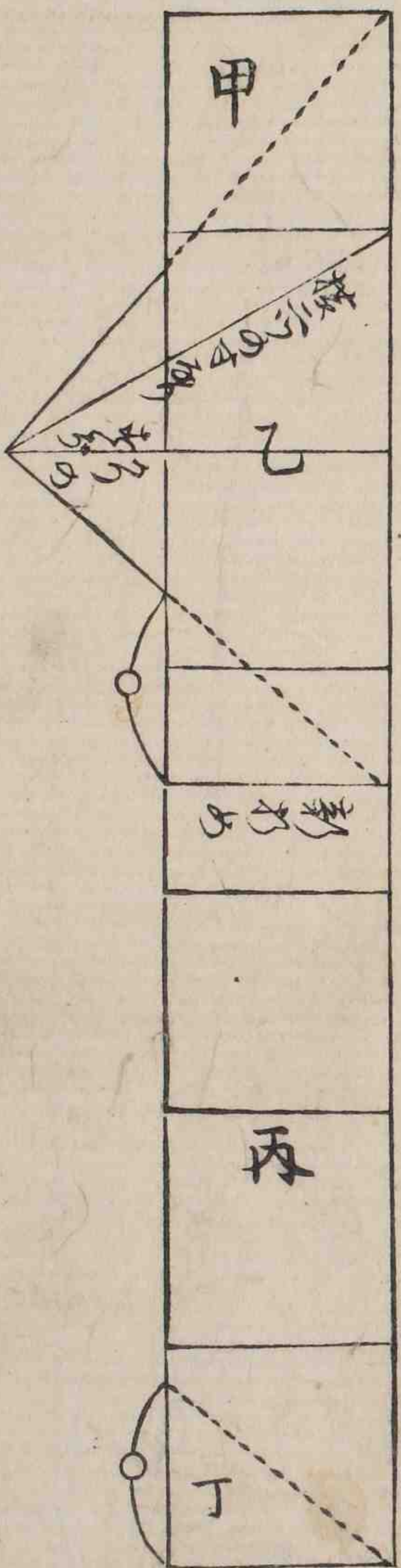


法曰は横のす四方の  
 紙とてうろこがさ  
 りてそを長き方を

よより三筋め一筋のこゝろあてそを尖う斜に下のこゝろ切て板  
 上の丸の寸とあて下の丸の寸あて又切てたのこゝろあて



板下のこゝろあてうろこを切てこの次あり  
 ありあり又よより三筋めの筋とたの方へ  
 なぐりおろしと最初筋のたの角と  
 四筋めのたの角と三筋目の川おろし筋と  
 三筋目は合ふやうに切とい

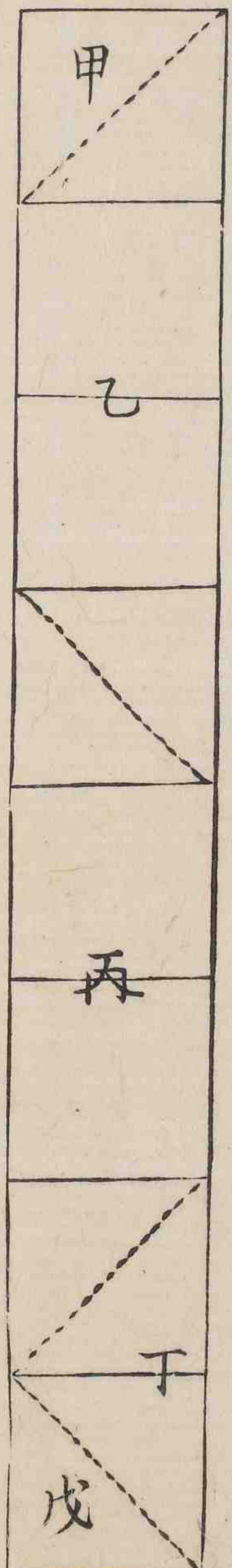


法曰は横のす四方の  
 紙とてうろこがさ  
 りてそを長き方を

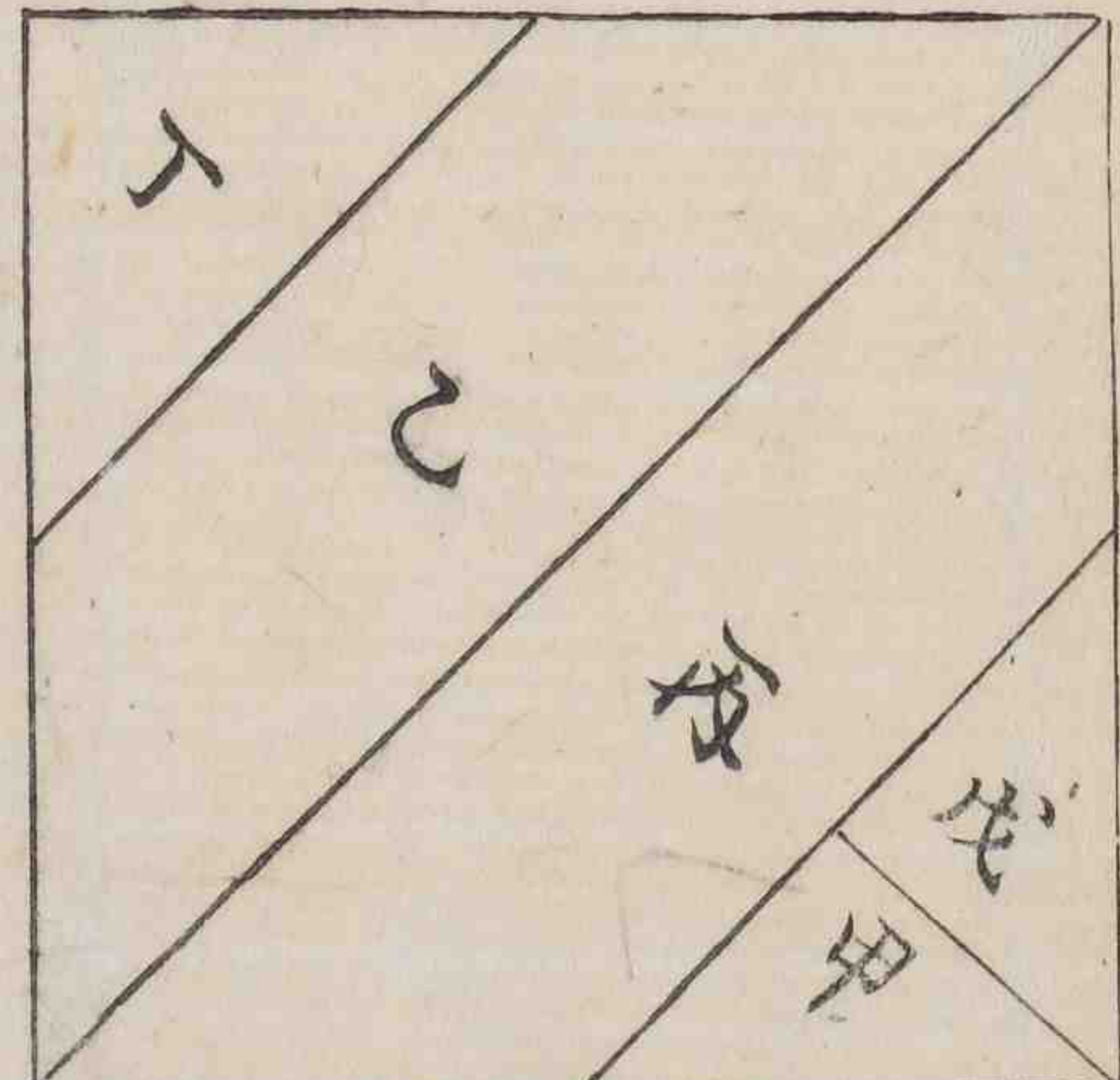
付板よより三筋めたの角よりうろこ筋とて横二つづんの寸と



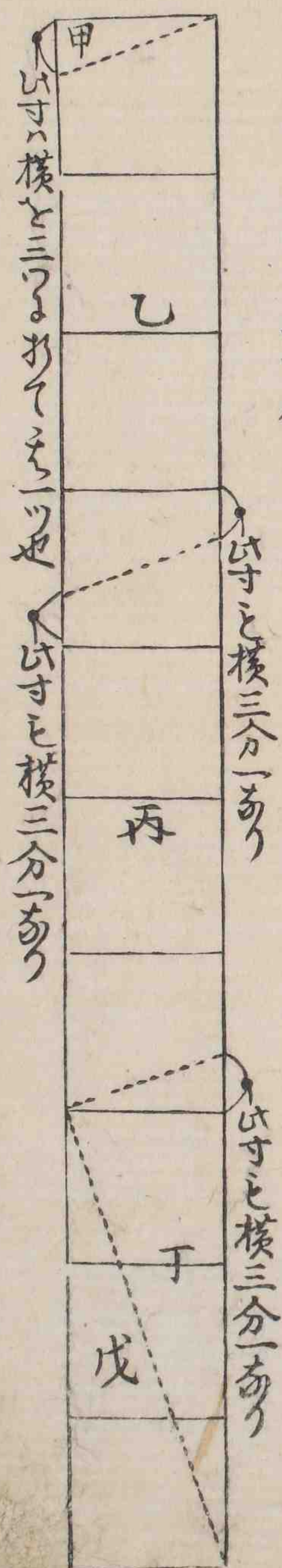
たとへば横八増倍と云ふより紙と四方に糸あてを切やうの事



たの下のとく切て  
かゝのとくあつた  
あ

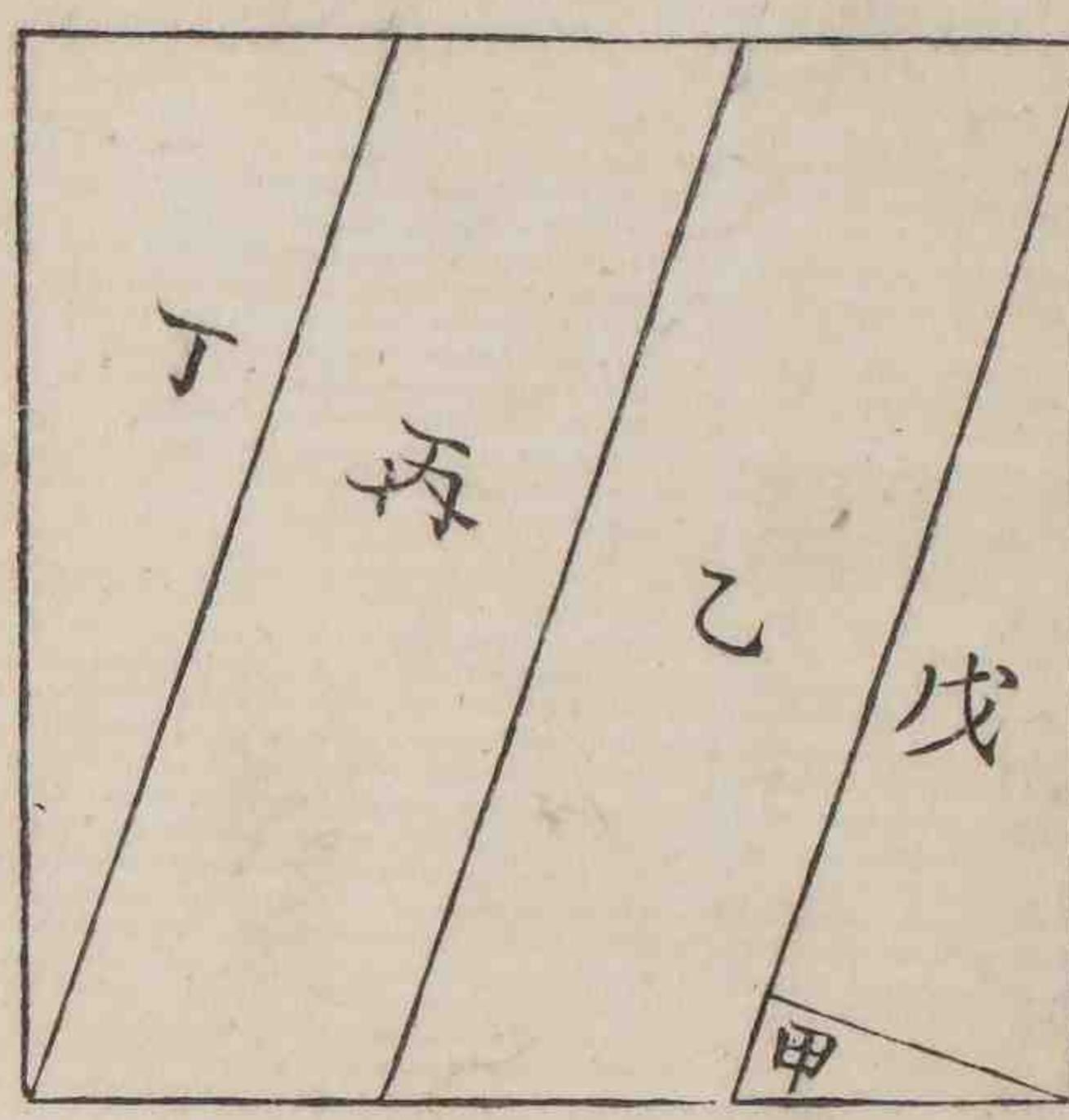


たとへ横十増倍と云ふ事乃紙と面方よりあるを切ゆく此事

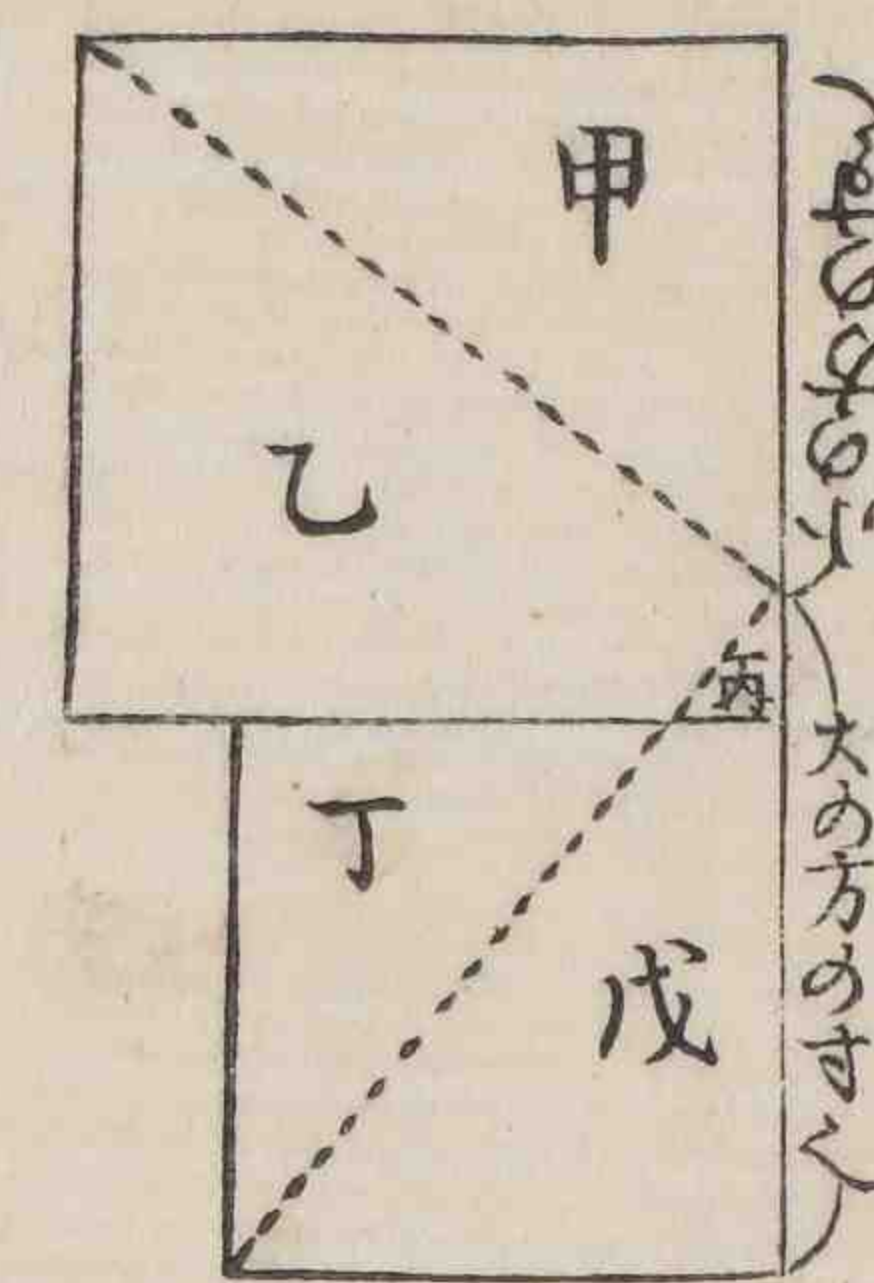


たの下のこく切てた乃雲のこくありぬるなり

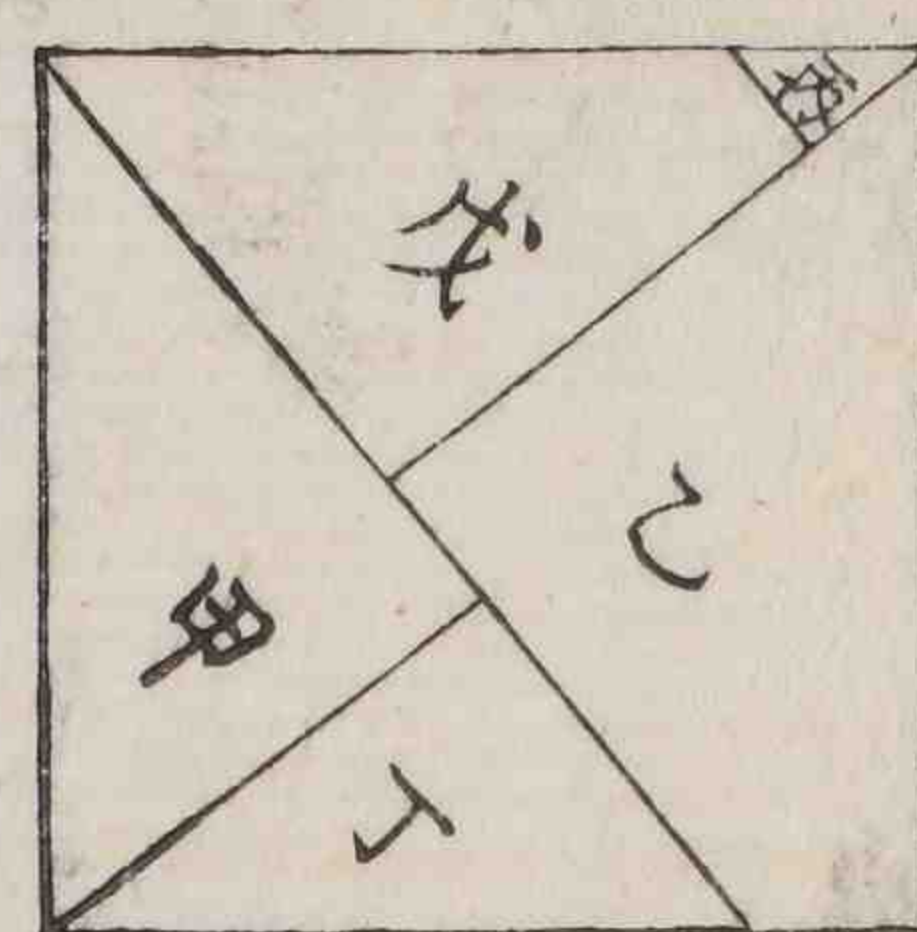




たとへば何寸四方にても心持次第の紙を割のふとく大小二つ  
 ふせり又四方よりあるとせたりやうの事

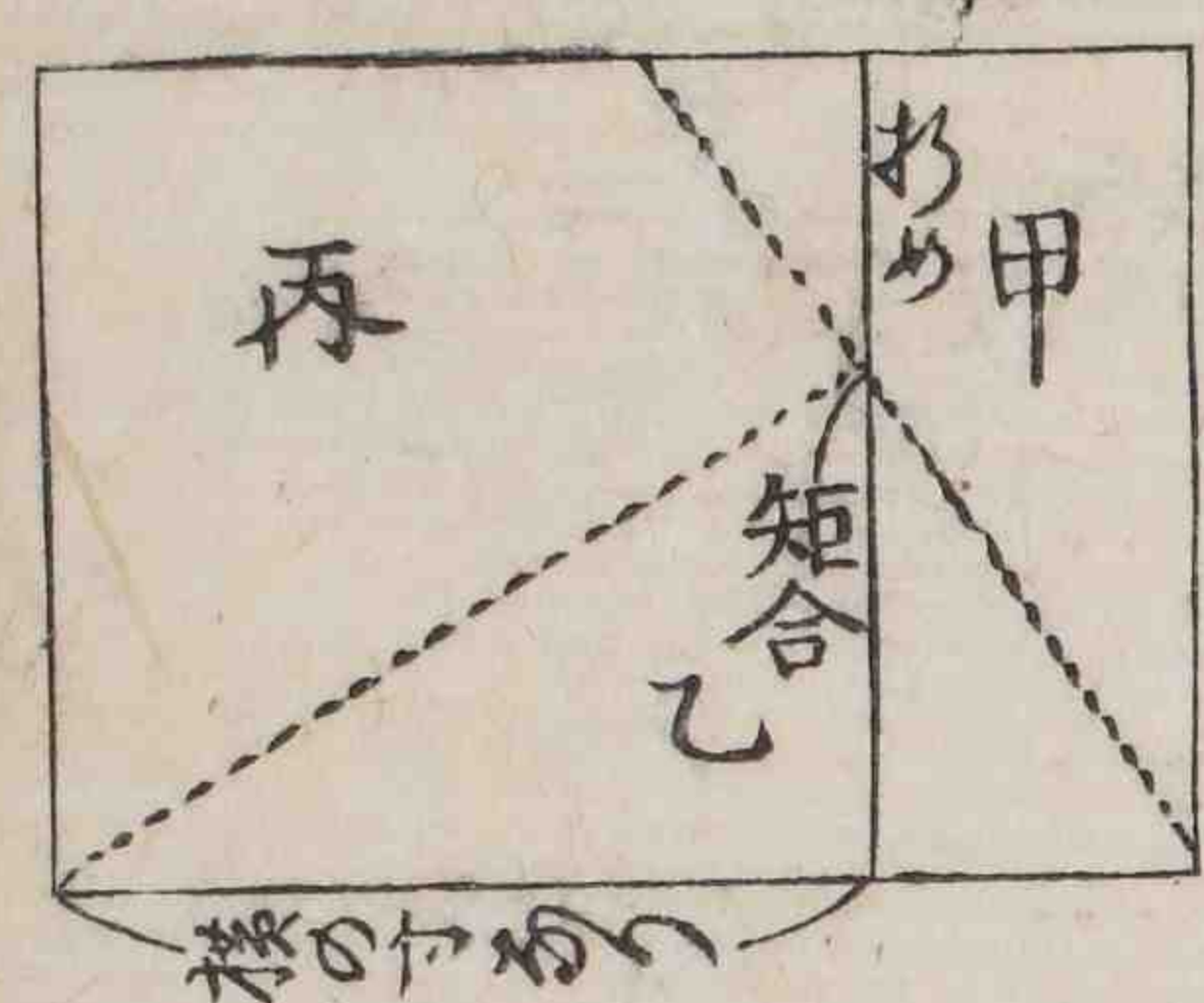


法曰小の方の寸とてそれと上の方のなる角  
 上下の方(等)のてく割てあるふたの方  
 上の角と下の方のたれ角と切てぬきあると



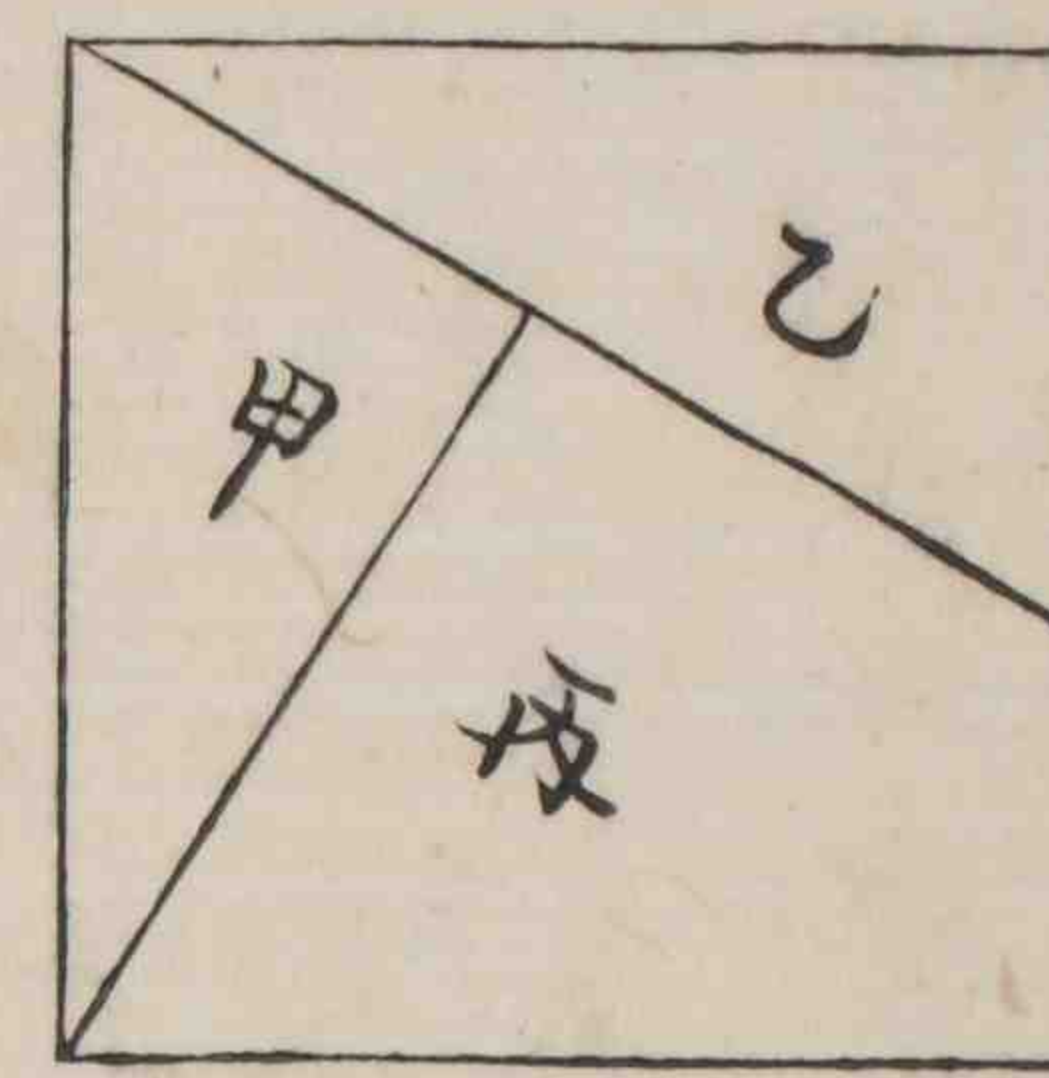
かゝのてくあるぬき是即勾股合せて  
 弦界とぬきなり

たとへば何のてくあるの直長短あるとり紙を四方よりあるとせたりやうの事



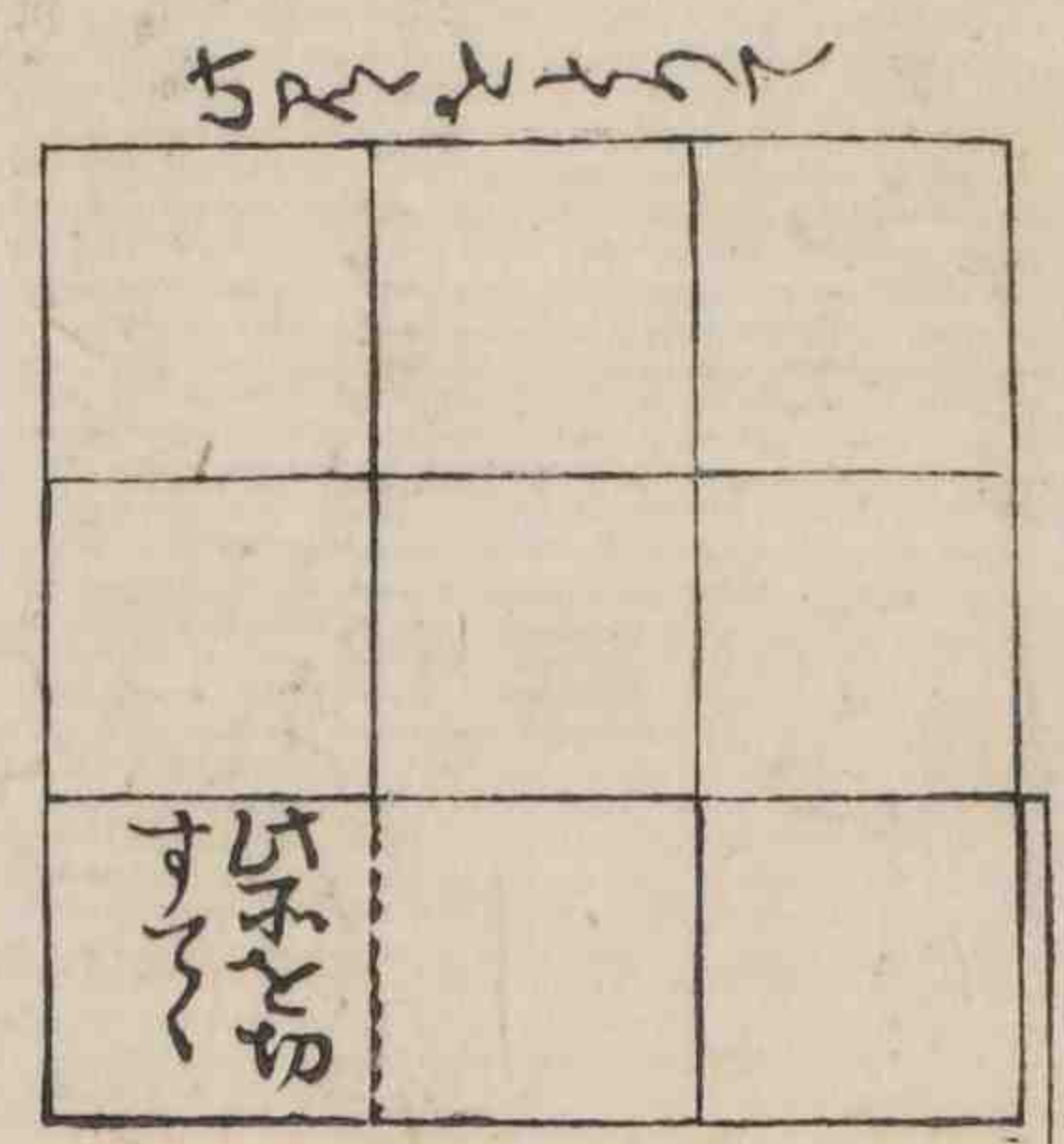
法曰横の寸とてそれと下の方の角よりたの  
 方(等)てあるふたの方のてくあるとれ  
 付てねそ筋と下のたの角と三ふ矩なり  
 金やうは切てたの角のてくあると



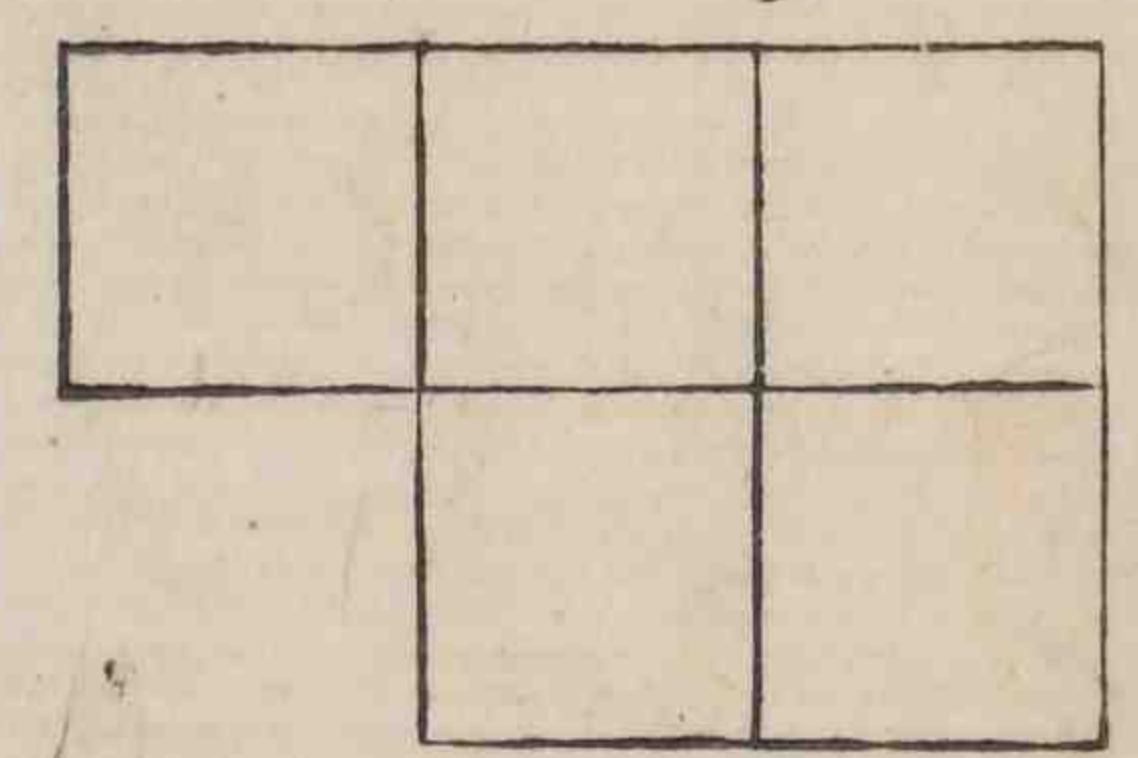


かくのうらなふありをうそけたら  
やうに丸くあさりのいふやう  
紙もも四方はあすといふやう  
紙を

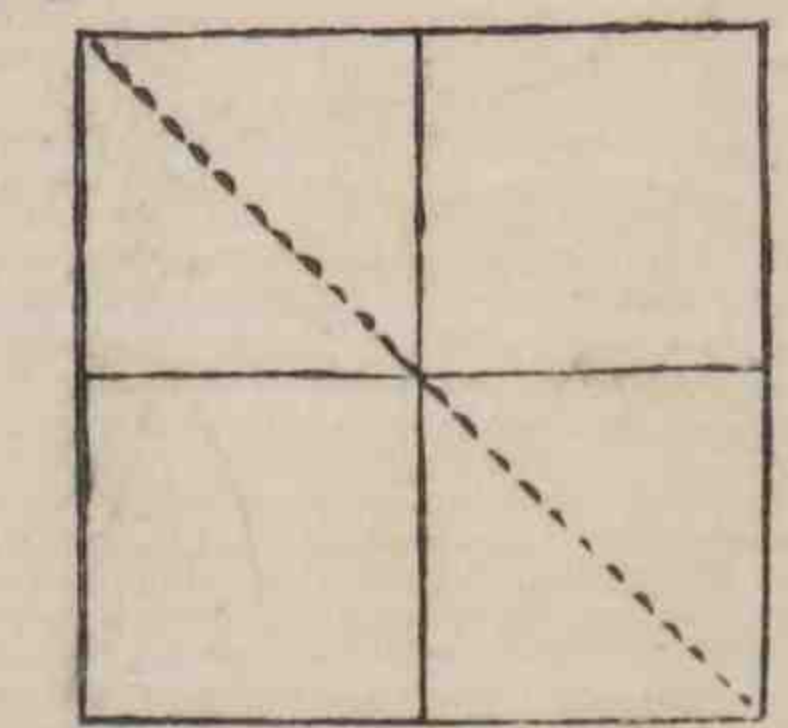
たとへ四方の紙をうそけたら  
切れてはみえを二方よ切て又四方よあすすたらやうの事  
け形むうよりおほく人のきくふといふもを比還仲仙が  
他とあて先板ようようあつよ一カよううふたのじ



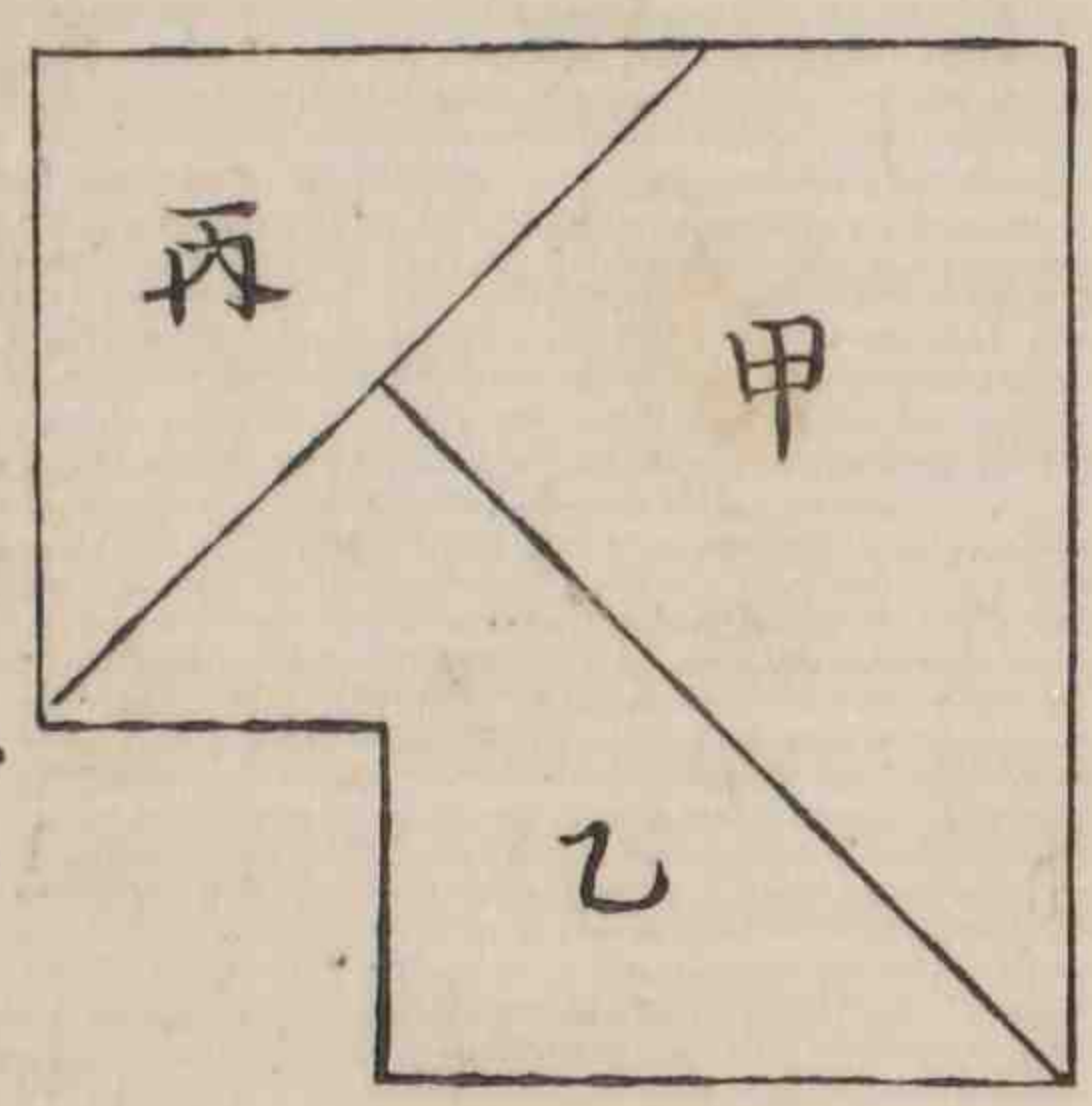
はみえ  
あて  
おけて  
下のあ  
ど



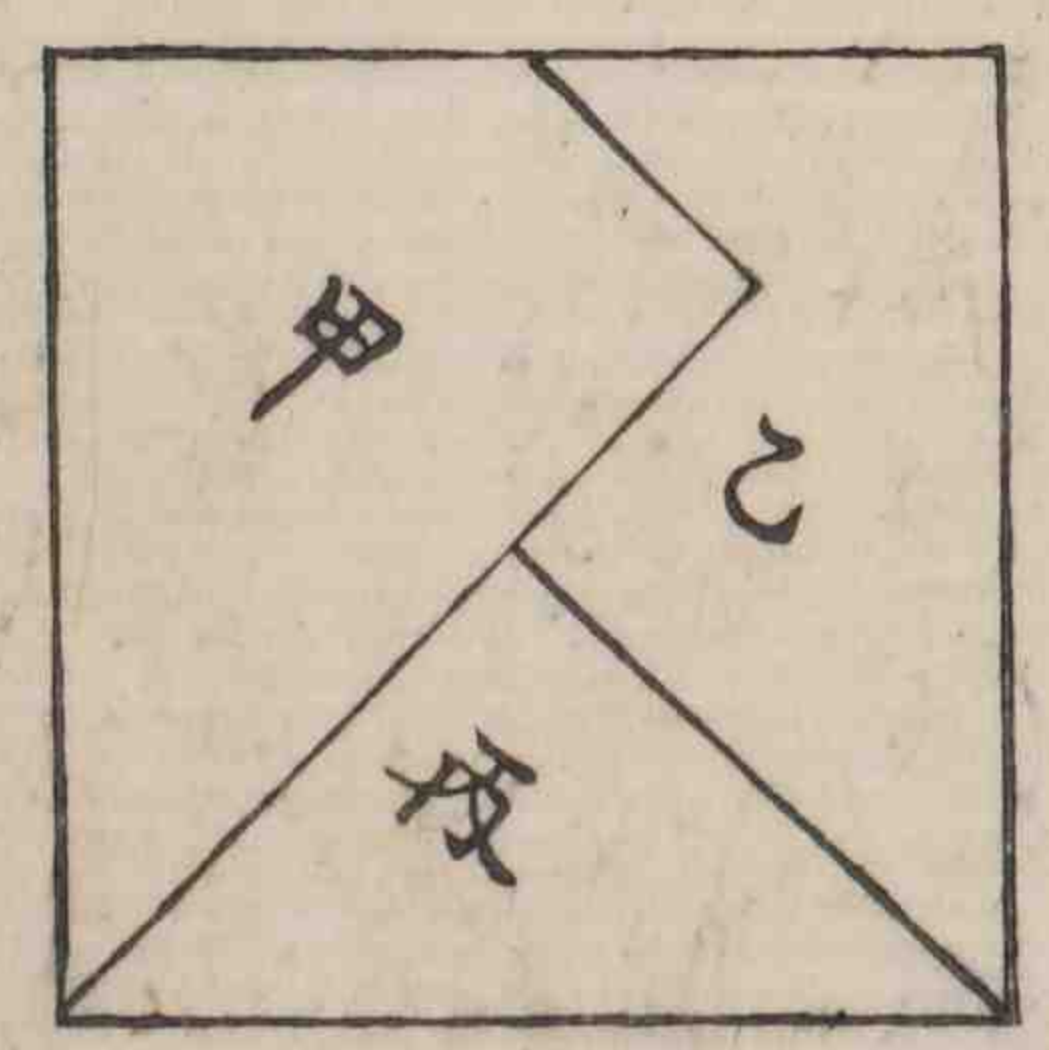
はみえうたの  
方とふのうの  
方へおて下の  
あど



うて  
上のたの  
方よ四枚  
をさうて  
あつは内  
うの方  
よてを板  
のけを板  
のけを板  
切あり



板ひろげて足れ  
かくのうらなふ  
下のあつてあ  
ああり



十九 百み減といふ事

ふ板いらあつた先の人よ一ふよをうそけてあつてあ



又いつくても二つ引いて各々あるを定めて惣數をいふの也  
 たとはちつ引く引時ころあるといひ又いつ引く引時二つあると  
 いひ又いつ引く引時ころあるといふ時の惣數何程と云ふ

答想救百一方局と子

法曰ちほく引時の<sup>ある</sup>知りつと十みづうして四十ふと金  
みづほく引時の知りつと二十つにしく廿と金三ツ  
ほく引時の知りつと七すつにしく百五十と金三合て  
二百といひけ内百ふを拂ひ跡より百ふより多き時ハ  
幾なも百ふりあり百一といへー又  
ちほく引時もみづほく引時もこつほく引時も知り  
なりと言時をそれへ救よいしむ又こつ交あぐ知りありと

子時ハ辰と云フ

二十又三百十五減乃事

れとはみづはく 11時へころあまる ちろはく 11時へころあまる 九つはく  
11時へみづあまるといふ時

答熱教石又十八

法曰めうけの竹うろと百二十六づにけりて三百七十八と云  
 ちけの竹うろと二百廿五うろと九百と云九つけの  
 竹うろと二百八十づにけりて千四百と云二に合て二千六百  
 七十八と云是と二百廿五うろとけりて法を百八と云る也

廿二 又十三減乃事



たといさうして、引時いさうなまう九つは、引時又うけりといふ時

答惣教又十九

法曰さうして、引時の値う一つと二十ふは、うけりて百八と金  
九つは、引時の値う一つと元八つは、うけりて百四十と金三石金  
八百八十ふは、金と六十三つ拂ひきて、金又十九と金  
本何れも先の人よさうなまうの教に減教を限りとさうがは

廿二 賞物銭教りどるゆ

改算記曰、銭を賣文とて、うけあまびとて、是こそ賞時よ、  
さうして、付銭二文づのねあまびを文よさうして、の値とて、文よ  
は、は、本の値うとて、さうして、銭教りど九百八十賞うれと

引時を、引とて、さうして、先うけとて、多ふうけ、四百三十と、極る  
是、何のいひ、や、さ、あ、り、た、の、教、に、狂、題、う、て、答、う、教、に、十  
三件あり、故に、凡の教三百八十五より、さうして、四百四十と  
は、は、中の、百三十とて、さうして、用、の、が、あ、り、よ、さ、餘、の、子  
桃、を、の、は、う、答、う、教、は、あ、の、こ、と、三百八十四と、四百四十  
ハ、下、と、う、の、教、と、さ、う、あ、い、う、で、答、う、教、を、得、人、や、依、う、て  
う、て、さ、う、と、あり、又、柴、田、理、を、馬、つ、法、行、う、門、人、の、あ、あ、る、細、目、と  
る、さ、う、と、い、う、と、管、の、教、と、さ、う、ね、也、賞、物、銭、教、を、事  
か、さ、の、こ、と、三、石、と、て、引、を、う、け、は、な、り、よ、也、二、石、と、て、  
引、を、別、小、記、と、て、さ、う、と、て、さ、う、と、て、負、教、と、う、て、こ、の、む











イ分は茄子九とくら桃八と引瓜二ハ九の差をとひいて  
答より数六十三件と得る也但此の題負数とくして  
前部より依て答より数とくらひたのど

假如有錢一貫文乃省欲買瓜茄桃九百六十箇瓜每  
七箇價三十文茄每十箇價七文桃每九箇價八文須  
要使果及錢無奇問三色各幾何

瓜三十五箇

價百八十九文

答曰茄二百五十箇

同百七十九文

桃六百七十五箇

同六百廿四文

九三 奇偶算の事

たとふて数いふに数も先の人より一よりとせしめれと一  
三と七九と比ふより二つ増は奇の数なり引時ちゆるといひ  
又二四六八十と比ふより二つ増は偶の数なり引時二つ減ると  
引時の数何れと問

答惣数三十二より一とひふ

法曰丁の法とすの法ととておふと方ふてそ  
あると引法とみとたふとさうけ合て得る数とすの方の  
法とちと加へて四とある也又丁の方よりあるとすの  
方よりあるとあるとあるとあるとさうけ合てあると  
あるとあるとあると又奇の方よりあると偶の方よりあると







及つといふ也或ハ又四のふ紙ある時の合算の人たの  
 ことあづかりいひかうどうす故よろしくなる人これと  
 してたのもなる一といふ紙のふは是より

勘老御伽雙紙上巻終

勘老御伽雙紙中目錄

- 一 あゑ 男女持年嫁事 あゑ 二ヶ條
- 二 うき 洛書乃事 うき 二ヶ條
- 三 えん 圓陳乃事 えん 三ヶ條
- 四 おか 同く中の一とてなるべき事 おか 二ヶ條
- 五 い 異形洛書乃事 い 四ヶ條
- 六 う くらりの種乃事 う 二ヶ條
- 七 し 杜綵乃定目 し 二ヶ條